総　例　言

1　本書は、長野県佐久埋蔵文化財調査センターの昭和61・62年度事業、岩村田遺跡群菅田遺跡第３次、岩村田遺跡群新町遺跡第３次、宮の上遺跡群宮の上遺跡、栗毛坂遺跡群中曽根遺跡の発掘調査及び藤塚遺跡の試掘調査報告書の合冊本である。

2　調査委託者　菅田・新町・宮の上遺跡　長野県佐久建設事務所
　　中曽根遺跡　株式会社　堀　内　組
　　藤　塚遺跡　浅　科　村

3　調査受託者　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　調査所在地　菅田遺跡　佐久市大字岩村田字今宿
　　新町遺跡　佐久市大字岩村田字新町・住吉・行人塚
　　宮の上遺跡　佐久市大字横和字宮の上
　　中曽根遺跡　佐久市大字岩村田字中曽根
　　藤塚遺跡　佐久市大字塚原字藤塚

5　編集分担は下記の通りである。また、原稿執筆分担については各遺跡の例言に明記してある。
　　菅田・新町・宮の上遺跡　小山岳夫　、　中曽根・藤塚遺跡　高村博文

6　本書及び菅田・新町・宮の上・中曽根・藤塚遺跡出土遺物、図面等すべての資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、岩村田・横和・塚原の各地区地元の方々には発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所、宇賀神誠司、臼田武正、岡村秀雄、河西克造、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、笹沢　浩、島田恵子、堤　隆、寺嶋俊郎、花岡　弘、福島邦男、丸山敞一郎、百瀬忠幸、森泉かよ子、由井茂也

（敬称略五十音順）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書　第10集

岩村田遺跡群
SU GE TA
菅　田　Ⅲ

長野県佐久市岩村田菅田遺跡第３次発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、長野県佐久建設事務所による都市計画街路事業西本町荒宿線建設工事事業に伴う、岩村田遺跡群菅田遺跡の第３次発掘調査報告書である。

2　調査委託者　長野県佐久建設事務所

3　調査受託者　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査対象地番および面積　　岩村田遺跡群菅田遺跡（ＩＩＳ）

佐久市大字岩村田字今宿　540、541―2、546　　195㎡

5　調査期間　昭和62年３月12日～３月20日（発掘調査）

昭和62年３月23日～３月31日（整理調査）

6　調査団の構成

事務局　佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長　　西沢　正巳

庶務係主任　　畠山　俊彦

庶　務　係　　高橋　純子（臨時職員）

調査団　　団　　長　　黒岩　忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　　林　幸彦、羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者　　小山　岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調　査　員　　篠原　浩江（佐久考古学会員）

調査補助員　　神部　妙子

協　力　者　　黒沢文子、中島文子、中篠繁子、油井幸子（発掘調査）

小林幸子、平林美津江、宮川百合子、和久井義雄（整理調査）

地形・地質指導　　白倉　盛男（佐久考古学会副会長）

7　本書の原稿執筆、編集は小山が行った。

8　本書で使用した写真は小山が撮影した。

9　本調査に関するすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、佐久市役所浅間支所にご協力・ご援助をいただきました。記してお礼申し上げます。

また、報告書作成にあたり、下記の各氏より多大なご指導、ご助言をいただきました。

臼田武正、島田恵子、堤　隆、花岡　弘、福島邦男、由井茂也（敬称略五十音順）

目　　次

例　　言

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1

　第1節　発掘調査に至る動機……1

　第2節　調査日誌……2

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……3

第Ⅲ章　第Ⅰ～Ⅳ地区の概要及び基本層序……6

　第1節　第Ⅰ地区……9　第3節　第Ⅲ地区……10

　第2節　第Ⅱ地区……10　第4節　第Ⅳ地区……11

第Ⅳ章　調査のまとめ……11

挿図目次

第1図　菅田遺跡位置図……1　第5図　第Ⅰ地区の層序……9

第2図　周辺遺跡分布図……3　第6図　第Ⅱ地区の層序……10

第3図　菅田遺跡の発掘区……6　第7図　第Ⅲ地区の層序……10

第4図　菅田遺跡の発掘区……7　第8図　第Ⅳ地区の層序……11

写真図版目次

図版　一　1　菅田遺跡近景

　　2　菅田遺跡調査地区近景

図版　二　1　菅田遺跡第Ⅰ地区および層序

　　2　菅田遺跡第Ⅱ地区層序

図版　三　1　菅田遺跡第Ⅲ地区

　　2　菅田遺跡第Ⅳ地区

図版　四　1・2　表土除去作業

　　3～5　スナップ

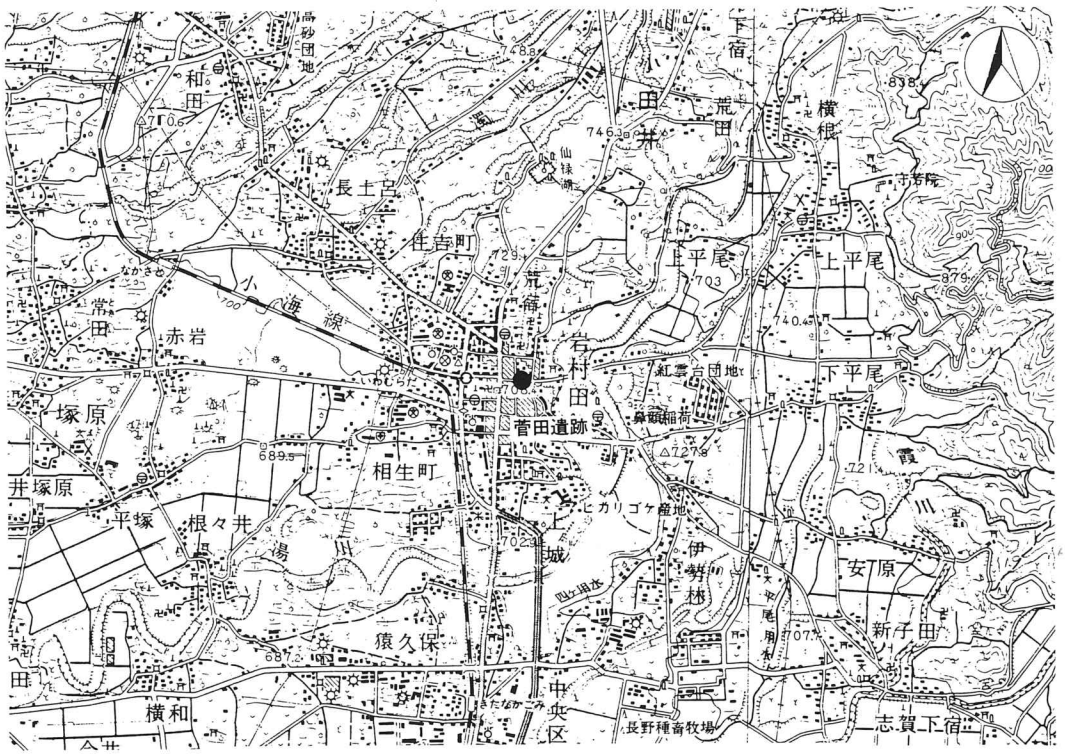
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

菅田遺跡は、佐久市岩村田に所在し、東西両側を侵蝕された佐久平特有の田切地形上に細長く伸びる岩村田遺跡群の南部東寄りに位置している。昭和59・60年度には今回の調査地区から、道路を挟んで北側の地区が佐久市教育委員会によって発掘調査され、東側に近接する中世城郭・大井城跡と関連する沢状に凹んだ低地形が確認された。低地形内からは中世と考えられる遺物も出土し、当遺跡の重要性が改めて認識された。

昭和61年度、佐久建設事務所が行う、都市計画街路事業西本町荒宿線建設工事事業が本遺跡内で計画され、現地にて佐久市教育委員会、佐久建設事務所の二者で協議を行った。

その結果、遺跡の破壊やむなきに至り、緊急に記録保存する必要性が生じた。そこで佐久市教育委員会が佐久建設事務所より委託をうけ、佐久市教育委員会からの委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第１図　菅田遺跡位置図（１：50,000　国土地理院地形図による）

第２節　調査日誌

３月12日（木）

佐久建設事務所、市教委、佐久埋文センターの３者で協議を行い、範囲確認を行う。

器材を搬入する。

３月16日（月）

表土除去作業を重機にて開始する。生活道路の確保・ガス・水道管等の保全のため、調査地区を東側より、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区に区分して調査を行う。いずれの地区にも表土下に黒色土が厚く堆積しており、ローム層まではかなり深く掘り下げなければならない。地元の人の話では、本調査区は昔は足軽屋敷近くの池であったという。また、黒色土上、あるいは黒色土中には、砂層の堆積がみられ、数次にわたって砂が流出していたことも確認された。

黒色土中からの出土遺物は中世と考えられる内耳土器片などがみられた。

３月17日（火）

第Ⅰ地区、第Ⅲ地区の黒色土掘り込みを作業員を導入して行う。湧水が激しいため、作業は困難を極める。

３月18日（水）

前日の作業を継続するが、手作業では深掘りが不可能なため、再び重機で作業を行う。土層分割作業も行う。

３月19日（木）

表土除去、地層確認トレンチ掘り下げ作業を重機にて行う。手作業を併行して行い、湧水が激しいため、ポンプを導入する。黒色土上より、部分的にローム層の検出をはかったが、ローム層が検出できたのは、東側の微高地へ連なると考えられるローム層レベルが高くなった第Ⅰ地区のみで、他の地区はかなり深い。あまり深く掘ると危険な状況に陥るため、ローム層検出は第Ⅰ地区のみで断念する。図面作成作業は第Ⅰ～Ⅲ地区のセクション図を完成する。

３月20日（金）

第Ⅳ地区のセクション図を作成する。層序説明の記入を行う。全体図を作成、その場で修正も行う。器材を撤収し、調査を終了する。

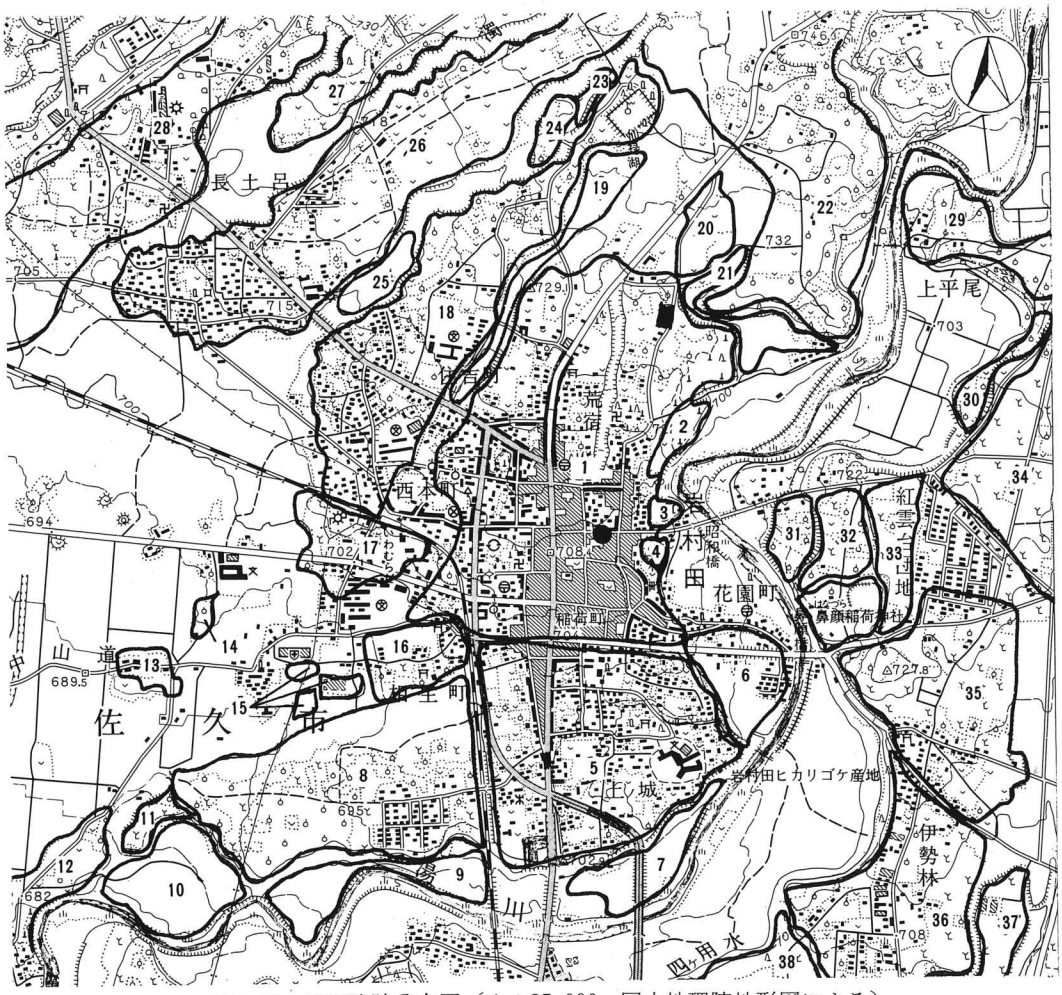
３月23（月）～３月31日（火）

図面修正、遺物実測、トレス、原稿執筆等、報告書作成作業を行ない、岩村田遺跡群菅田遺跡の全調査を完了する。

第II章　遺跡の立地と環境

佐久平は南北に流下する千曲川によって盆地の平坦部をほぼ２分され、川西の左岸地域にあたる野沢・中込地区、川東の右岸地域にあたる岩村田・平根・東地区で遺跡の立地条件も大きく異なる。川東の右岸地域は、基盤に浅間・黒斑火山の水蒸気爆発による塚原泥流が分布する地帯であり、更に追分第一灰流（Ｐ１）と呼称される浮石火山灰層が厚く堆積し、本地域の基本的な地盤を形成している。一方、川西の左岸地域は、浅間火山の軽石・火砕の噴出により堆積物がみられず、凝灰岩・砂質凝灰岩・細粒砂岩・礫質凝灰岩が薄層の互層を繰り返す相浜層を基盤として、表土もこれが風化分解した強粘土を基本に形成されている。

岩村田遺跡群菅田遺跡は浅間火山の噴出物を地盤とする千曲川右岸地域に立地する。この地域



第２図　周辺遺跡分布図（１：25,000　国土地理院地形図による）

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺　跡　名	所　　在　　地	立地	時代						備　　考
					縄	弥	古	奈	平	中	
1	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後、新町、菅田、古城他	2段丘		○	○	○	○	○	
1	52-1	六供後遺跡	岩村田字六供後	2段丘		○				○	S55年度発掘調査
1	52-2	新町遺跡	岩村田字新町	2段丘		○	○			○	S59・60年度発掘調査
1	52-3	菅田遺跡	岩村田字菅田	2段丘						○	本調査
2	51-2	石並城跡	岩村田字石並他	2段丘		○	○	○	○	○	S54年度一部発掘調査
3	51-1	王城跡	岩村田字古城	2段丘		○	○	○	○	○	
4	51-3	大井城跡	岩村田字古城	2段丘		○	○	○	○	○	S55・59・60年度一部発掘調査
5	117	上の城遺跡群	岩村田字丹過・上の城・西八日町他	2段丘	○	○	○	○	○	○	S48・54・58年度一部発掘調査
6	118	下信濃石遺跡	岩村田字下信濃石他	1段丘					○		
7	124	岩井堂遺跡	岩村田字岩井堂	1段丘		○	○	○	○		
8	105	一本柳遺跡群	岩村田字東一本柳・北一本柳他	2段丘		○	○	○	○	○	S43・47年度発掘調査
9	100	中鳴澤遺跡群	岩村田字中鳴澤	1段丘		○	○	○	○		
10	99	中西の久保遺跡群	岩村田字中西の久保・東西の久保	1段丘		○	○	○	○		
11	98	北西の久保遺跡	岩村田字北西の久保	2段丘		○	○	○	○	○	S44・45・57・60年度発掘調査
12	96	鳴澤遺跡群	根々井字鳴澤	1段丘	○	○	○	○	○		
13	101	上砂田遺跡	岩村田字上砂田他	台　地		○	○	○	○		
14	102	松の木遺跡	岩村田字松の木	台　地		○	○	○	○	○	
15	103	宮の西遺跡	岩村田字宮の西	台　地		○	○	○	○	○	S58年度一部発掘調査
16	104	宮の後遺跡	岩村田字宮の後	台　地		○	○	○	○	○	
17	39	円正防遺跡群	岩村田字円正防・蔦石・清水田他	台　地	○	○	○	○	○		S53・59年度一部発掘調査
18	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字琵琶坂・上直路他	台　地		○	○	○	○		S60年度２箇所発掘調査
19	42	中久保田遺跡	岩村田字中久保田・下久保田他	低　地		○	○	○	○		
20	43	西赤座遺跡	岩村田字西赤座他	台　地		○	○	○	○		
21	44	上岩子遺跡	岩村田字上岩子他	低　地					○		
22	10	栗毛坂遺跡群	岩村田字柳田・鵜縄澤他、小田井字前藤部他	2･3段丘		○	○	○	○	○	S59・60・61年度一部発掘調査
23	541	曽根新城跡	岩村田字下穴虫	低　地						○	
24	45	新城遺跡	岩村田字新城	低　地		○	○	○	○		
25	38	下蟹沢遺跡	長土呂字下蟹澤、中蟹澤	低　地		○	○	○	○		
26	9	長土呂遺跡群	長土呂字下聖端他	台　地		○	○	○	○	○	
27	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上巾原他	台　地	○	○	○	○	○		S54・55・57年度一部発掘調査
28	7	周防畑遺跡群	長土呂字周防畑・若宮他	台　地	○	○	○	○	○		S54・55・58年度一部発掘調査
29	53	潰石遺跡	上平尾字潰石他	2段丘		○	○	○	○		
30	46	腰巻遺跡	下平尾字腰巻・高内	2段丘		○	○	○	○		
31	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	2段丘	○	○	○	○	○		S55年度発掘調査
32	49	上小平遺跡	岩村田字上小平	3段丘					○		
33	48	桟敷遺跡	安原字桟敷	3段丘					○		
34	47	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保、下平尾字六間他	3段丘	○	○	○	○	○		S61年度発掘調査
35	119	蛇塚Ａ遺跡群	安原字蛇塚・西大久保	3段丘					○		
36	121	東内池遺跡	新子田字東内池	台　地					○		S60年度一部発掘調査
37	120	蛇塚Ｂ遺跡群	新子田字蛇塚・内池	3段丘					○		S54・58・59年度一部発掘調査

は、浅間山火口を基点とする水流によって平野部まで放射状に発達した佐久平特有の「田切り」と呼ばれる谷地形が幾筋も形成され、これらに挟まれて細長く南北に伸びる数条の台地上に弥生～平安時代を中心とした周防畑（28）、長土呂（26）、枇杷坂（18）、岩村田（１）、上の城（５）、一本柳（８）など著名な大集落遺跡群が展開されている。岩村田遺跡群はその中でも中心部に位置する。東側直下には大田切りの一つとも考えられる千曲川の支流湯川が南流し、深い侵蝕によっ

て比高差の大きな断崖が形成されて自然の要害となり、中世においては台地縁辺に大井宗家とその一族が拠った大井城跡（２・３・４）が築造されている。今回、発掘調査が行われた菅田遺跡は大井城跡の西側に近接する。過去２度（昭和59・60年度）の調査結果を総合すると、菅田遺跡所在地点は有機質の黒色土が一様に厚く堆積しており、低湿地帯が広く展開されていることが予想される。この地点の北側直上部には岩村田遺跡群の北半分を東西に二分する小田切りが縦走することを勘案すると、現状ではほぼ平坦な地形をなしている菅田遺跡は、旧状では北側の田切りから継続する谷地形の低湿地遺跡と考えられる。更に推し量れば、この田切りは菅田遺跡の南側にまで更に長く伸びていることが十分予想され、現状では一つの遺跡群として認識されている岩村田遺跡群は、実は東西に二分されている可能性も非常に強いのである。現況では全くわからなかったこの低湿地遺跡の存在は大井城跡の範囲や、大井城西側における防御施設を考える上で極めて重要な示唆を与えてくれるものと言える。

参考文献

白倉　盛男　1986　「栗毛坂遺跡群付近の自然環境（地形と地質）」『栗毛遺跡群芝間遺跡』

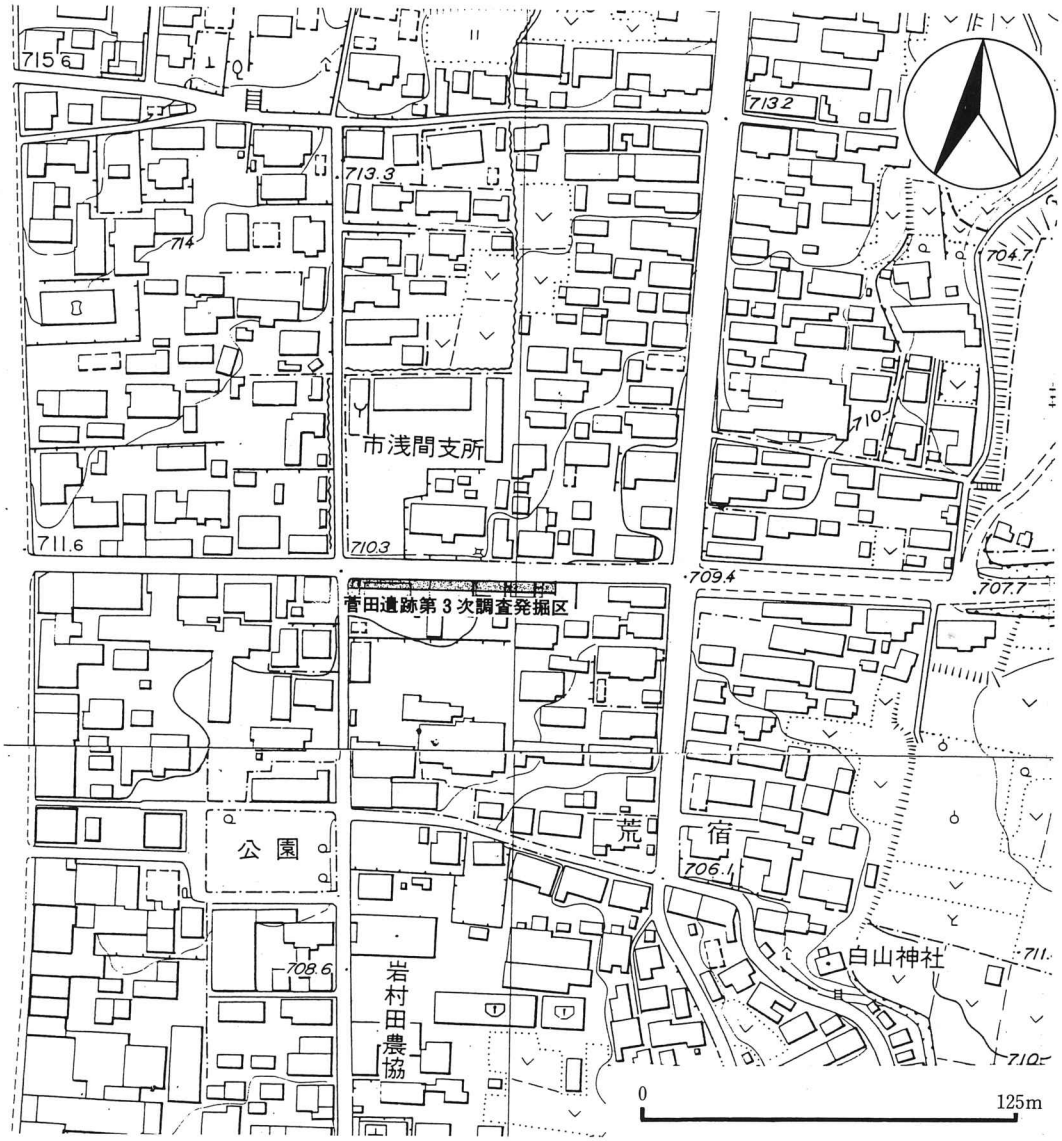
白倉　盛男　1986　「西裏遺跡群付近の自然環境（地形と地質）」『西裏遺跡群西裏・竹田峯遺跡』

白倉　盛男　1986　「大井城跡（黒岩城跡）の自然環境（主として地形・地質）」『大井城跡（黒岩城跡）』

白倉　盛男　1986　「１琵琶坂遺跡付近の自然環境（地形地質）」『琵琶坂遺跡』

第Ⅲ章　第Ⅰ～Ⅳ地区の概要及び基本層序

今回の調査地区は先述したように住宅密集地区に近接するため、ガス・水道等の配管を避けること、また、生活道路を確保することが義務づけられた。このため、調査対象地区全域にわたっての調査は不可能となり、第４図に示すように４地区に区分けして調査を行った。以下に各地区ごとにその概要及び基本層序を記載する。

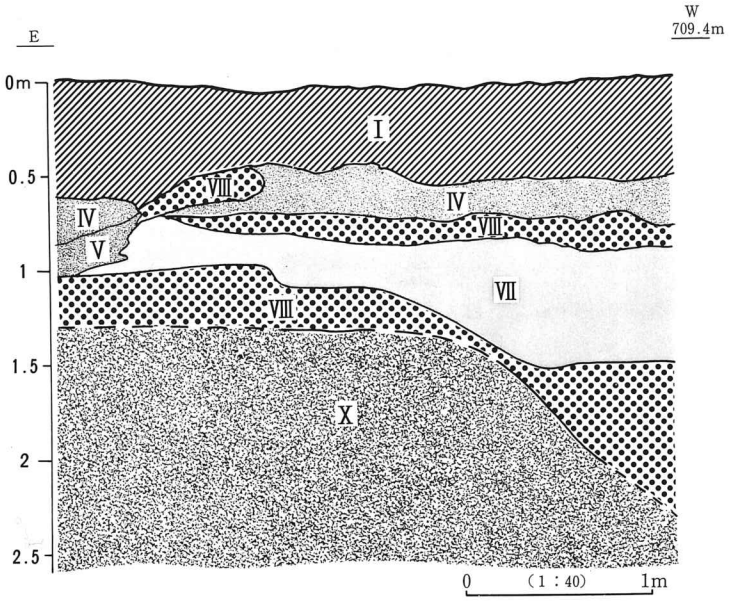


第３図　菅田遺跡の発掘区（１：2,500　佐久市基本図による）

第４図　菅田遺跡の発掘区

第１節　第Ｉ地区（第５図）

第Ｉ地区は今回の調査区の東端にあたる。50～60cmの厚さで堆積する表土（第Ｉ層）下には砂層（第IV・Ｖ層）の数次にわたる流れ込みが顕著で黒色土と互層をなしている。地山ローム層は調査地区の約（およそ）北半部までは地表から約130cmの平坦面を保っているが、南半分に至ると急激にレベルが低下し、黒色土（第VIII層）の堆積も非常に厚くなる。



第５図　第Ｉ地区の層序

以上のような所見から、本調査地区は低湿地帯が形成され始める最も東端部にあたる部分と考えて大過ない。このローム層は東側に至ると更にレベルが上がり、大井城跡の地盤をなすものと考えられる。尚、遺物は本調査区からは出土しなかった。

菅田遺跡の層序説明（第Ｉ～IV区共通）

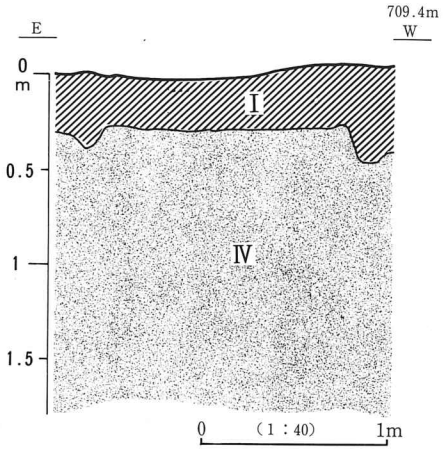
第Ｉ層　10ＹＲ4/1　褐灰色土　径30cm以上の大型の礫が多量に混入する。
第II層　10ＹＲ4/1　褐灰色土　礫や現代の瓦などが多量に混入し、粘性なし。
第III層　10ＹＲ5/4にぶい黄褐色土　細かい砂粒がまじり、粘性は弱い。
　　} 表土

第IV層　7.5ＹＲ8/8　黄橙色土　きめが粗くもろい。
第Ｖ層　10ＹＲ8/2　灰白色土　きめが非常に細かく、粘性は強い。
第VI層　10ＹＲ6/2　灰黄色土　Ｖ層よりきめが粗く、粘性は弱い。
　　} 砂層

第VII層　7.5ＹＲ8/3　浅黄橙色土　IV層よりきめ細かいが、黒色土がまじる。
第VIII層　7.5ＹＲ2/1　黒色土　きめ細かく、粘性は非常に強い。　有機質土層
第IX層　10ＹＲ6/2　灰黄褐色土　赤色粒子を多量に含み、VII層よりも粘性が弱い。
第Ｘ層　7.5ＹＲ2/8　橙褐色土　地山のローム層

第２節　第II地区（第６図）

本調査区は、第Ｉ地区の西側に近接する。東西方向にトレンチ確認を行った結果、第６図のような層序が確認されたが、表土（第Ｉ層）下の砂層（第IV層）の堆積は極めて厚く、地表から約180cm下まで掘り下げても、終息していない。更に深く掘り下げたわけであるが、セクション壁が湧水によって崩落してしまったため、地表下180cm以上の層序確認はできなかった。以上、本地区も低湿地の中にあると考えられる。

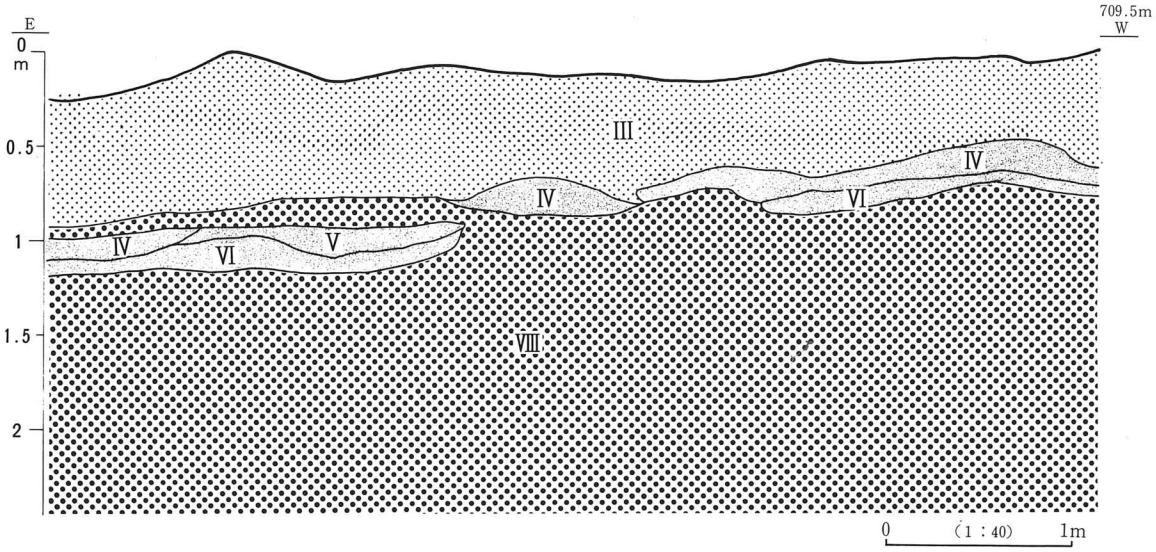


第６図　第II地区の層序

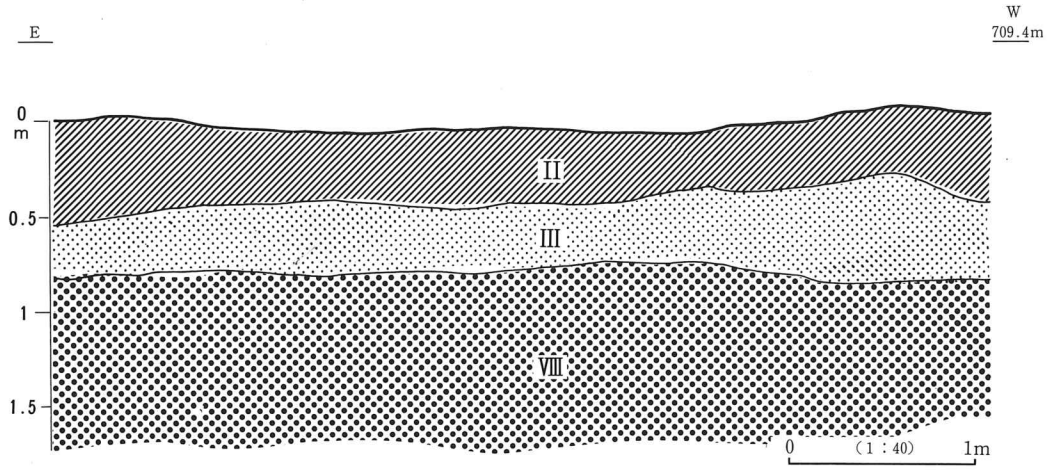
尚、遺物には表採資料ではあるが、平安時代の所産と考えられる土師器高台付坏（内面には黒色処理が認められる）、中世の所産の考えられる内耳土器の口縁部などの細片がある。

第３節　第III地区（第７図）

本調査区も第Ｉ・II地区と同様に東西方向にトレンチを入れ、層序確認を行った。表土（第III層）はＩ・II地区とは異なり、礫をあまり含まず、砂粒がまじる土を基本としている。また、表土下はＩ・II地区のように砂層の厚い流入がみられず、直下の黒色土（第VIII層）上面に薄い堆積



第７図　第III地区の層序



第８図　第Ⅳ地区の層序

が認められるのみである。黒色土（第Ⅷ層）の堆積は極めて厚く、地表から約2.5mの深さまでは確認しえたが、それ以下は、湧水が激しく、また、セクション壁が崩壊する状況に至ったため、やむをえず掘り下げを中止することになったため、未確認である。本地区も低湿地の中にあると考えられる。遺物は検出されなかった。

第４節　第Ⅳ地区（第８図）

本調査地区は今回の調査区では西端にあたる。やはり、東西方向にトレンチを設定し層序確認を行った。表土にはII・III層があり、その下は黒色土（第Ⅷ層）が厚く堆積し、他の地区のように砂層の流入はみられない。また、この地区も他と同様、湧水が激しいため、地表下約1.7mまでで掘り下げを中止した。従って、黒色土の底面は未確認であるが、本地区も低湿地であることは間違いない。遺物は行火と考えられる瓦器や、近代・現代と考えられる陶磁器の破片が出土した。

第Ⅳ章　調査のまとめ

今回の調査は長さ65mの道幅調査であったため、広い視野での考察はできないが、第１・２次の調査結果もふまえて菅田遺跡の性格を考えてみたい。調査で得られた所見は第３次調査の第Ⅰ～Ⅳ地区がいずれも低湿地帯であるということ、また、第１・２次調査地区も同様に低湿地帯であることで、菅田遺跡がほぼ全面にわたって、低湿地に立地する遺跡であることがわかる。この低湿地が原始・古代の生活にどのような機能を果していたのか、また、中世において築造された

1．菅田遺跡近景（北東より）

2．菅田遺跡調査地区近景（東方より）

1．菅田遺跡第Ⅰ地区および層序

2．菅田遺跡第Ⅱ地区層序

1．菅田遺跡第Ⅲ地区（西方より）

2．菅田遺跡第Ⅳ地区（西方より）

図版　四

1．表土除去作業開始（第Ⅰ地区）

2．表土除去作業（第Ⅲ地区）

3．スナップ

4．スナップ

5．スナップ

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市
岩村田遺跡群　菅　田　遺　跡　Ⅲ

1987年３月
編集者　佐久埋蔵文化財調査センター
発行者　長野県佐久市教育委員会
印刷所　株式会社佐久印刷所

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書　第10集

岩村田遺跡群

SHIN　MACHI

新　町　Ⅲ

長野県佐久市岩村田新町遺跡第３次発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、長野県佐久建設事務所による都市計画街路事業御代田佐久線改良工事に伴う、岩村田遺跡群新町遺跡の第３次発掘調査報告書である。

2　調査委託者　　長野県佐久建設事務所

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査対象地番　岩村田遺跡群新町遺跡（ＩＩＭ）

佐久市大字岩村田字新町878―2、住吉845―１、846―１、848、851―１・３、853―２、856―１、859―１、862、873―２、876、879、880、885、池畑356―１、356―４、356―10、行人塚371―３

5　調査期間　　昭和62年９月１日（火）～昭和62年９月４日（木）（発掘調査）

及び面積　　昭和62年９月５日（金）～昭和63年２月29日（月）（整理調査）　　720㎡

6　調査団の構成

事務局　　佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長　　西沢　正巳

庶務係主査　　畠山　俊彦

庶　務　係　　田中　芳美（臨時職員）

調査団

団　　長　黒岩忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　林　幸彦、羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者　小山岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調査　主任　羽毛田伸博（佐久考古学会員）

高村博文（佐久埋蔵文化財調査センター調査主任）

調　査　員　篠原浩江（佐久考古学会員）

調査補助員　神部妙子

協　力　者　和久井義雄（佐久考古学会員）、小林幸子、平林美津江、宮川百合子

7　本書の原稿執筆、写真撮影、編集は小山岳夫が行った。尚、遺跡の環境については昭和61年度刊行の第１次調査報告書で詳述されているため、本書では省略した。

8　本調査に関する資料はすべて佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において小林保一氏他、地元の方々から数々のご協力を頂き、また、報告書作成にあたっては下記の各氏より多大なご指導、ご助言をいただきました。記してお礼申し上げます。

臼田武正、島田恵子、堤　　隆、花岡　弘、福島邦男、森泉かよ子、由井茂也

（敬称略五十音順）

目　　次

例　　言

凡　　例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機……1

第２節　調査日誌……2

第Ⅱ章　基本層序……2

第Ⅲ章　調査の成果……3

挿　図　目　次

第１図　新町遺跡の位置……1

第２図　基本層序模式図……2

第３図　新町遺跡の出土遺物……3

第４図　新町遺跡の発掘区……4

第５図　新町遺跡第３次調査トレンチ設定図……5

写　真　図　版　目　次

図版一　1　新町遺跡発掘区近景

2　新町遺跡発掘区近景

3　第１区トレンチ

4　第２区トレンチ

5　第３区トレンチ

6　第３区作業スナップ

7　第４区トレンチ

8　第５区トレンチ

図版二　1　第７区トレンチ

2　第７区作業スナップ

3　第８区トレンチ

4　第９区トレンチ

5　第10区トレンチ

6　第11・12区トレンチ

7　第13区トレンチ

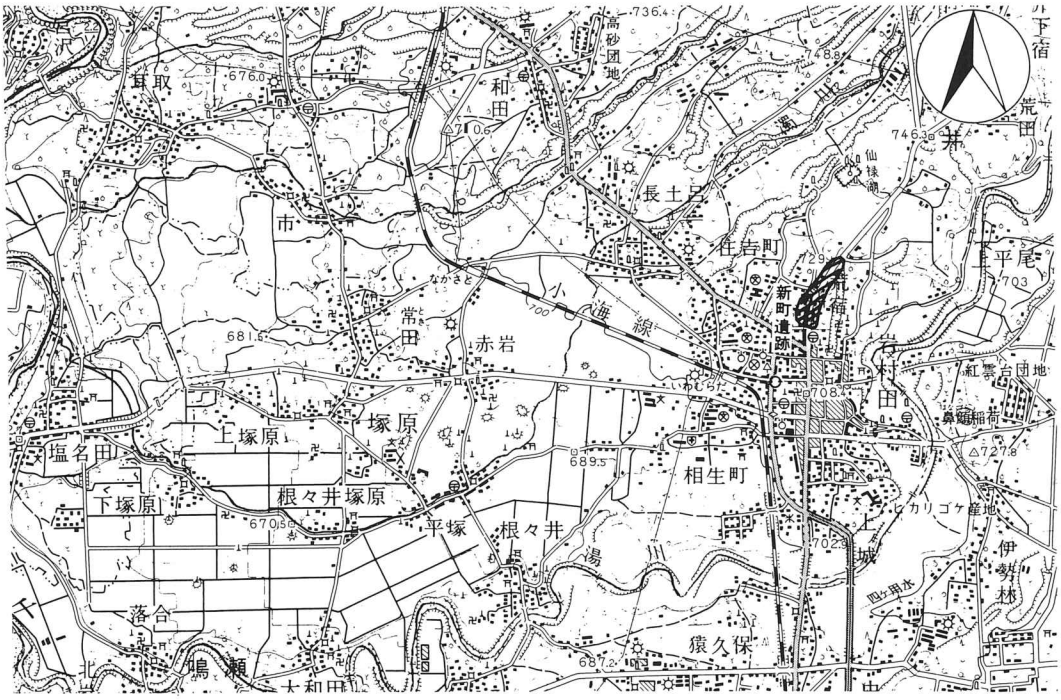
8　第14区トレンチ

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

新町遺跡は、佐久市北部にみられる特異な「田切り」地形が微高地に変化する岩村田遺跡群の北西端に位置している。岩村田遺跡群は、佐久市遺跡詳細分布調査、数箇所の発掘調査によって弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世にかけての大複合遺跡群であることが知られている。

昭和60年度岩村田地籍都市計画街路事業・御代田佐久線改良工事事業が本遺跡内で計画され、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に発掘調査し、記録保存する必要性が生じた。このため、昭和60年度・61年度には２回にわたり、佐久建設事務所より委託をうけた佐久市教育委員会（Ｓ60)、佐久埋蔵文化財調査センター（Ｓ61）によって第１次、第２次の発掘調査が既に行われており、弥生・古墳時代の遺物、中世以前の遺構・遺物、近世の遺物などが検出され、多大な成果をあげている。本年の調査は前年度に引き続く第３次調査にあたり、昭和61年度発掘調査地区の道路を挟んだ東側の地点を佐久市教育委員会より委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行うこととなった。



第１図　新町遺跡位置図（１：50,000 国土地理院地形図による）

第２節　調査日誌

８月31日(月)　重機を搬入する。ガス・水道管設置場所の確認およびテント設営場所の確保等を行なう。器材搬入、テント設営も行う。

９月１日(火)～９月３日(木)　生活道路の確保、水道管保全のため調査地区の東側南部Ａ地区を７箇所（第１～７区）東側北部Ｂ地区を６箇所（第８～13区）に分断して調査を開始する。また、西側地区はＣ地区（第14区）とする。

Ａ・Ｂ・Ｃ地区の表土を重機によって除去し、遺構・遺物の検出に務めたが、表採遺物を除き、落ち込みがほとんど確認されなかったため、全体図および層序図を作成、写真撮影を行って調査を終了する。

９月４日(金)　器材・テントの徹収を行う。重機によって埋め戻しを行い、後に重機を撤収する。

９月５日(土)～昭和63年２月29日(月)　報告書作成作業を行い全調査を完了する。

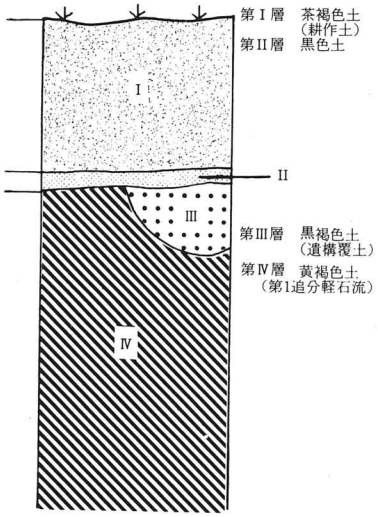
第II章　基本層序

第１節　基本層序

新町遺跡の第３次本年度調査地区はＢ地区北端から、Ａ地区南端までの比高差、現況地形で約5.1mをはかり、比較的急な傾斜面を形成している。

基本的な地層は第１・２次調査地点とほぼ同様で第IV層第１追分軽石流（Ｐ１）を基盤とし、その上に黒色土（第II層）が薄く、更に上に耕作土（第Ｉ層）が30cm内外の厚さで堆積している。この層序は調査区のほぼ全域にわたって共通するが、Ｃ地区においては黒色土が約１m以上堆積することが確認されており、現在はほぼ平坦に見える地形も、旧状では幾筋かの谷状の凹地形が発達していることが想像される。

今回は遺構が検出されなかったが、遺構確認面は第IV層第１追分軽石流（Ｐ１）上であると推察される。



第２図　新町遺跡基本層序模式図

第Ⅲ章　調査の成果

今回の第３次調査は、第１・２次調査の調査地区と県道御代田佐久線を隔てた東側を主に行った。用地買収等の都合上、第３次調査の発掘区も大きく５箇所に分かれているため、便宜的に南からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ地区と命名し、Ａ～Ｃ地区は本調査、Ｃ・Ｅ地区は立ち合い調査を実施した。以上各地区毎に調査概要を記しておきたい。

Ａ地区　全長約110m、幅３ｍ内外の調査地区である。生活道路の確保、ガス・水道管保全のため、調査できない箇所が多数あり、第５図のように第１～７区に分断する調査を余儀なくされた。１～７区いずれからも遺構は検出されず、地表下30cm内外で黄褐色ローム層（第Ⅳ層）に達する。表採遺物ではあるが第４区から「焙烙」の破片が採集された。口径は推定できないが器高が6.0cm未満の低いもので、近世に位置づけられる可能性が強い形態を具備している。

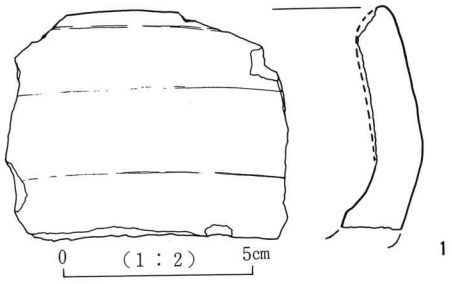
Ｂ地区　全長約78m、幅２～３ｍの調査地区である。Ａ地区と同様８～13区に分けて調査を行った。遺構・遺物は検出されず、９区を除いて地表下30cm内外で黄褐色ローム層に達することが認められた。９区は地形が急激に落ち込み、黒色土、砂が２ｍ程厚く堆積し、湧水も激しい。土層観察から自然に形成された地形と判断したい。

Ｃ地区　Ｂ地区と道路を挟んで西側に対面する調査地区で全長11.5m幅4.5m内外を測る。遺構・遺物は検出されなかったが、Ｂ地区９区と同様に黒色土、砂が厚く堆積する地区である。南東方向にあるＢ地区９区とは近接した位置にあり、Ｃ地区からＢ地区９区にかけて谷状の凹地形が発達していた可能性は極めて強いと言える。

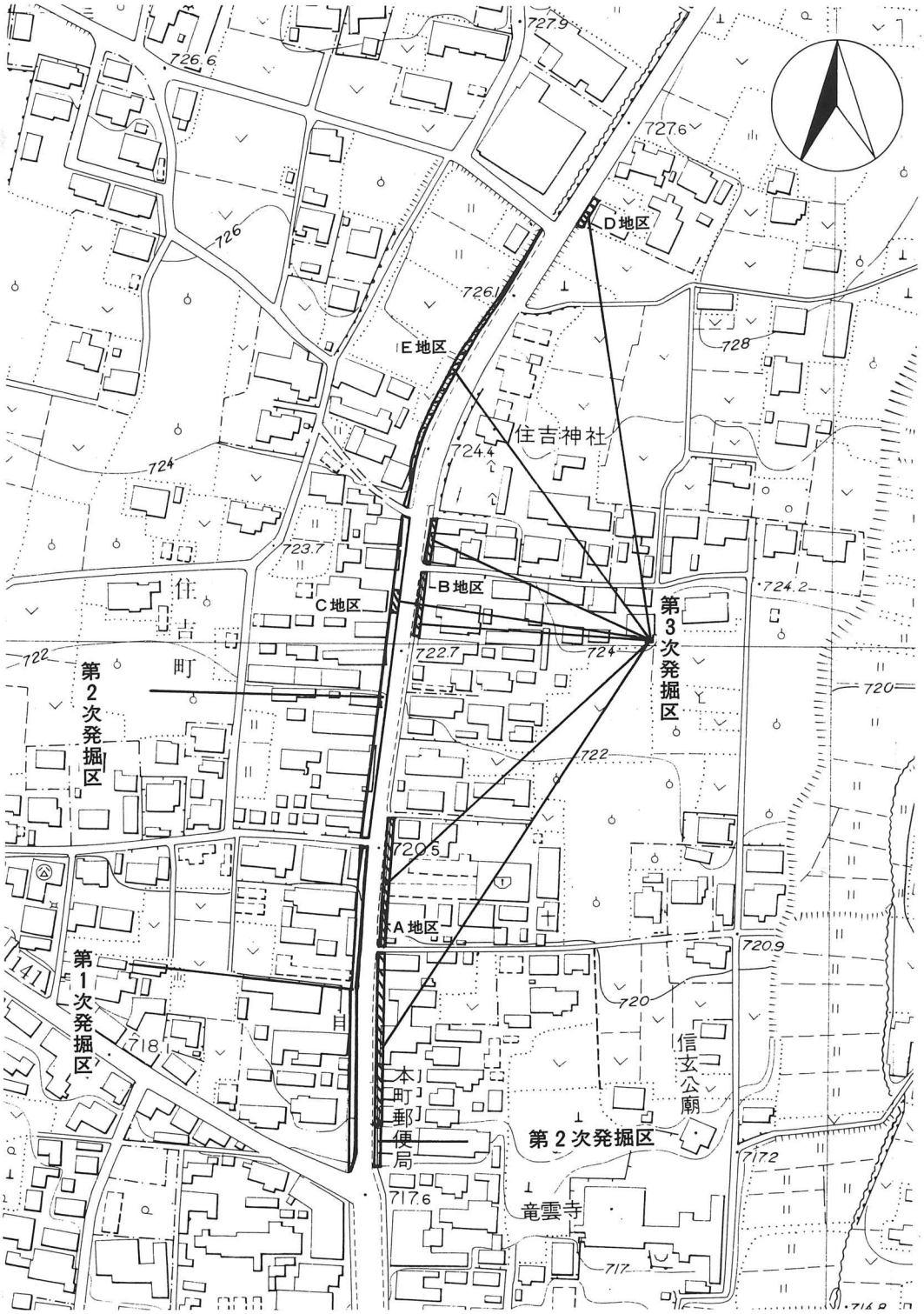
Ｄ・Ｅ地区　第３次調査の最北部にあたる調査地区であるが、調査できる幅があまりにも狭小であるため、立ち合い調査を実施したが、遺構・遺物は認められなかった。

まとめ　今回の調査では遺構は検出されなかった。遺物も焙烙の破片が１点表採されたのみである。しかし、一つの遺物が語るものの意義は極めて大きい。何故なら、１・２次調査で確認された近世における当地の生活の跡が今回の調査地区まで及んでいることが実証されたからである。また、現状では平坦化している地形が旧状では谷状の凹地形が入り込んでいた。

当地域の遺跡の全容を追求していく上でこの確認事項は今後重要な示唆を与えるものであるかもしれない。



第３図　新町遺跡の出土遺物

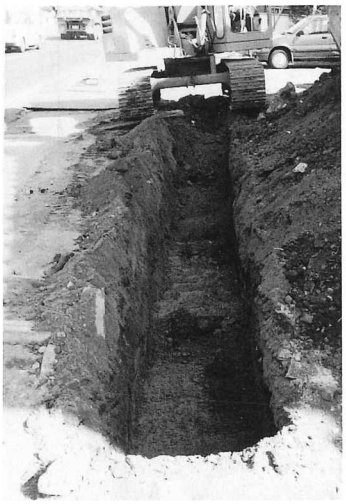


第4図　新町遺跡の発掘区（1：2,500　佐久市基本図9による）

第5図　新町遺跡第3次調査
トレンチ設定図

1．新町遺跡発掘区近景（南西より）

2．新町遺跡発掘区近景（北西より）

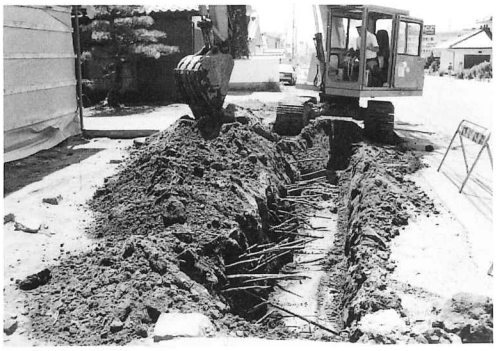


3．第1区トレンチ（南方より）

4．第2区トレンチ（北方より）

5．第3区トレンチ（北方より）

6．第3区作業スナップ



7．第4区トレンチ（北方より）

8．第5区トレンチ（北方より）

図版二

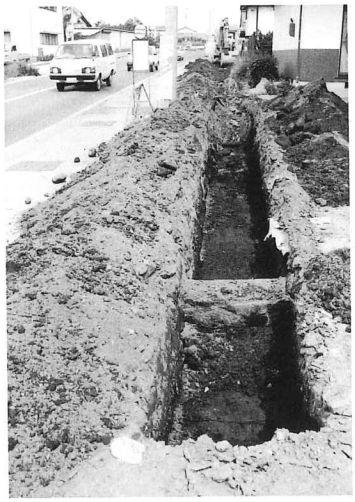
1．第7区トレンチ（北方より）

2．第7区作業スナップ

3．第8区トレンチ（南方より）

4．第9区トレンチ（南方より）

5．第10区トレンチ（南方より）



6．第11・12区トレンチ（南方より）

7．第13区トレンチ（北方より）

8．第14区トレンチ（北方より）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市岩村田遺跡群
新　町　遺　跡　Ⅲ

1988年２月
編集者　佐久埋蔵文化財調査センター
発行者　長野県佐久市教育委員会
印刷所　株式会社佐久印刷所

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書　第10集

栗毛坂遺跡群

NAKA SO NE

中　曽　根

長野県佐久市岩村田中曽根遺跡発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は昭和62年度株式会社堀内組によるパチンコ店敷地造成他事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　株式会社　堀内組

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査所在地籍及び面積　　栗毛坂遺跡群中曽根遺跡（ＩＮＳ）

佐久市大字岩村田字中曽根10―７・17、11―１・６　　480㎡

5　調査期間

昭和62年９月１日～９月８日、９月９日～10月28日

6　調査団の構成

事務局

佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長　　西沢　正巳

庶務係主査　　畠山　俊彦

庶　務　係　　田中　芳美（臨時職員）

調査団

団　　長　　黒岩　忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　　林　　幸彦（佐久市教育委員会）

羽毛田　卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者　　高村　博文（佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任）

調　査　員　　篠原　浩江（佐久考古学会員）

調査補助員　　神部　妙子

発掘協力者　　小林　幸子、宮川　百合子

整理協力者　　平林　美津江、宮川　百合子

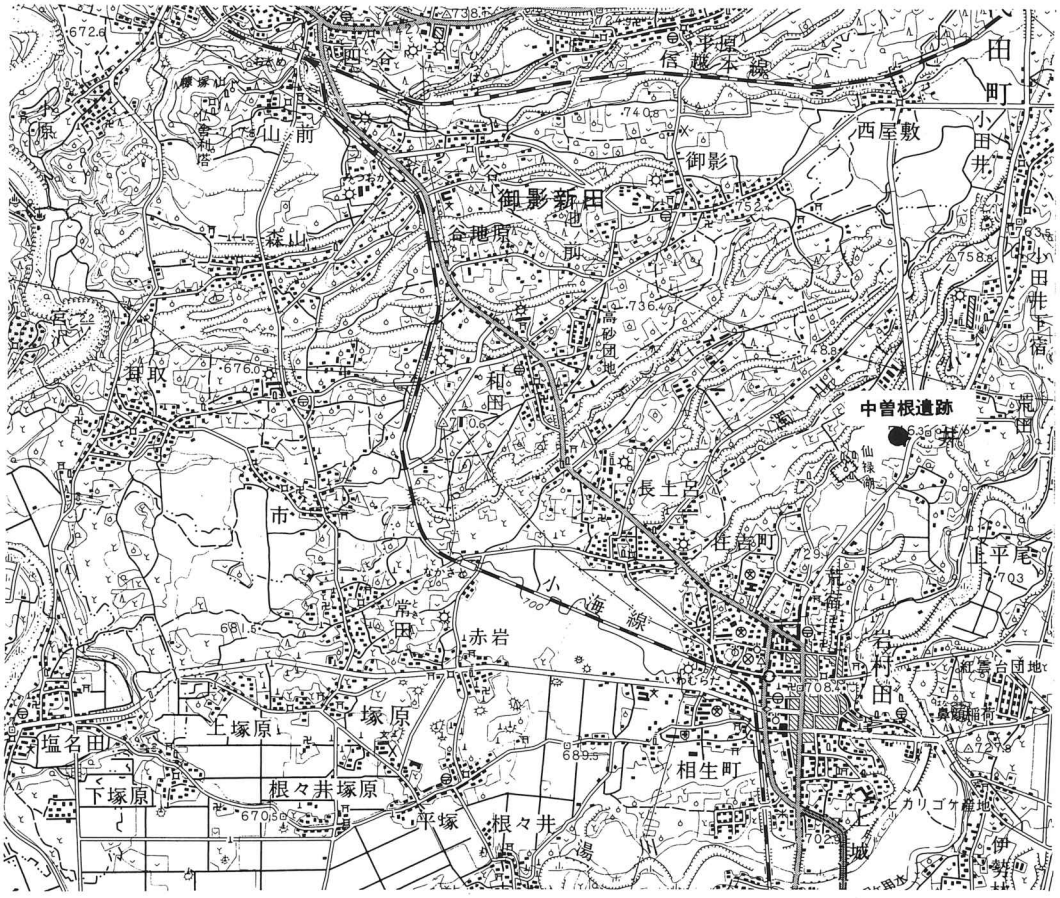
7　本書の編集・執筆は、第３章遺跡の位置と環境を白倉盛男・高村が行い他はすべて高村が行った。

8　本書及び中曽根遺跡すべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

1　発掘調査に至る動機

栗毛坂遺跡群中曽根遺跡は、佐久市岩村田に所在し、田切り地形に挟まれた台地状地形に立地する。本年度、長野県埋蔵文化財センターが中曽根遺跡の西方に近接して栗毛坂遺跡群C地区において発掘調査を実施しており、平安時代の竪穴住居址25棟、掘立柱建物址20数棟、その他溝状遺構、井戸址などが検出されている。また、東方においても、佐久市教育委員会が直営で昭和60年度に行った、前藤部遺跡においても平安時代の住居址が確認されている。

今回、株式会社堀内組によりパチンコ店敷地造成他事業に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久市教育委員会が株式会社堀内組より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第１図　中曽根遺跡の位置（１：50.000）国土地理院地形図による）

2　調査日誌

9月1日（火）

重機による表土削平を行う。田の耕作土の下にさらに20㎝位の耕作土が存在し、その下より漆黒色土が検出され、長野県埋蔵文化財センターの臼田氏からの教示によれば、田切りの低い部分ではないかとのことである。

9月2日（水）

重機による表土削平を続行し、ほぼ発掘区内を漆黒色土の上まで削土し終わる。

さらに発掘区内に約5mの間隔をおいて、ローム層まで掘り下げるトレンチを入れ遺構が存在するかどうか確認する。

9月3日（木）

発掘区内にローム層まで掘り下げるトレンチを入れたが、遺構は皆無と判断する。

駐車場予定地内に西部からトレンチを入れたが、田切りの低地部分にあたると思われ、水がどんどん湧きだしてくる。

9月4日（金）

標高の移動を行い、744、828mに設定する。発掘区の全体図を実測し、東側の壁面をきれいにする。

9月5日（土）

基本土層の実測を行い、駐車場予定地内に入れた試掘トレンチの実測を行う。

9月7日（月）

発掘区・試掘トレンチ・遠景の写真撮影を行い、すべての作業を終了する。

9月8日（火）

駐車場に入れた試掘トレンチが危険なため重機による埋め戻しを行う。

9月9日（水）～10月28日（水）

室内において報告書作成作業を行い、すべての作業を完了する。

3　遺跡の位置と環境

中曽根遺跡が存在するのは佐久市北部である。佐久市北部は、浅間火山南東斜面標高1,200m付近の千ヶ滝から発源する湯川が南流して、岩村田鼻顔稲荷神社付近で流れを変え西流し、地形的に1つの区画を形成している。この佐久市北部を含む浅間山南山麓地帯の地質は、浅間火山の第

一次外輪山である黒斑火山（最盛期には標高3,000m近い大火山）が、その火口壁に近い蛇掘川源泉付近で水蒸気爆発の際に火熱泥流（塚原岩屑流）を南方約15km離れた佐久市塚原付近まで達しており、総数百を越す大流れ山地帯を形成し、その分布は東側に湯川の線、西側は近津付近、南縁はほぼ千曲川に致る不等辺三角形の地域に及んでいる。また、第二次外輪山前掛火山の長期による噴火噴出物火山灰・砂礫は浮石を多量に含み浮石流（追分第一軽石流〈P1〉）となって数次にわたって南斜面を厚く覆い、東は湯川左岸の一部と右岸全面、西は小諸市栃木川左岸懐古園地点まで分布し、小諸市、御

第２図　周辺遺跡分布図（１：25,000）

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
					縄	弥	古	奈	平	中	
1	10	栗毛坂遺跡群	小田井字笹沢前藤部 岩村田字東赤座他	台地		○	○	○	○		
1-1		中曽根遺跡	岩村田字中曽根	〃							本調査
2	16	鵜縄澤端一里塚	岩村田字鵜縄澤端	〃							近世
3	11	跡坂遺跡群	小田井字皎月他	〃		○	○	○	○		
4	12	中金井遺跡群	小田井字西浦他	段丘		○	○	○	○	○	
5	4	曽根城遺跡	小田井字曽根城	台地	○	○	○	○	○		
6	7	周防畑遺跡群	長土呂字周防畑他	〃	○	○	○	○	○		
7	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上中原他	〃	○	○	○	○	○		昭和58年度発掘調査
8	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂隠し他	〃		○	○	○	○	○	
9	541	曽根新城跡	岩村田字下穴虫	〃						○	
10	45	新城遺跡	岩村田字新城	低地		○	○	○	○		
11	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字枇杷坂	台地		○	○	○	○		
12	42	中久保田遺跡	岩村田字中久保田	〃		○	○	○	○		
13	43	西赤座遺跡	岩村田字西赤座他	〃		○	○	○	○		
14	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後他	〃		○	○	○	○	○	
15	44	上岩子遺跡	岩村田字上岩子他	低地					○		
16	53	潰石遺跡	上平尾字潰石・中川原他	台地		○	○	○	○	○	
17	46	腰巻遺跡	下平尾字腰巻・高内	段丘		○	○	○	○		
18	47	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保他	台地	○	○	○	○	○		

代田町の大部分と佐久市の北半の地表面を覆っている。その北方、標高の高い部分には、第二次前掛火山による追分火砕流が厚く重っている。

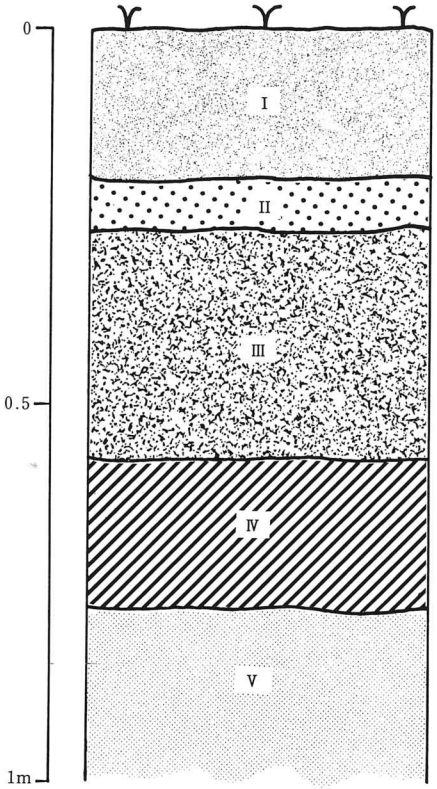
中曽根遺跡が存在する地域は、浅間火山による浮石流が厚く覆った地帯に属し、この新しい火山灰・砂礫は未分解凝結不充分な地層で、水蝕抵抗力が極めて弱く、この地帯一帯には火山山麓特有な流水の浸蝕による大小の「田切り」谷地形の発達が目覚しく、浅間山頂を中心に山麓地形に応じて放射状に幾筋も分布発達している。

この「田切り」地形に挟まれた台地上に遺跡が存在し、第2図で示したように、北から曽根城遺跡（5）、周防畑遺跡群（6）、芝宮遺跡群（7）、長土呂遺跡群（8）、枇杷坂遺跡群（11）など、佐久市において弥生時代～平安時代における大遺跡群が存在する。栗毛坂遺跡群内において、最近の発掘調査によって遺跡の概要がだいぶ明らかになってきている。昭和58年度佐久市教育委員会が実施した柳田遺跡からは、縄文時代早期の土坑が検出されており、また、昭和60年度佐久埋蔵文化財調査センターが実施した芝間遺跡からは、古墳時代後期の住居址1棟、平安時代前葉の住居址3棟、平安時代の特殊遺構1基、中世の竪穴状遺構1基等が検出されている。昭和60年度佐久市教育委員会が実施した前藤部遺跡試掘調査からは、奈良～平安時代と思われる住居址が22棟（試掘調査のため住居址としたものの中には竪穴状遺構や溝も含まれている可能性はある）ほか、土坑20基、溝17基等が検出されている。さらに、昭和61～62年度にかけて、長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所が実施した関越自動車道上越線建設用地内の大規模な（78,500㎡）発掘調査により、栗毛坂遺跡A地区より縄文時代土坑15基、古墳時代竪穴住居址11棟、掘立柱建物址1棟が、B－b地区より古墳時代住居址4棟、平安時代住居址9棟、掘立柱建物址10棟、土坑30基が、B－c地区より古墳時代住居址2棟、古墳～奈良時代と思われる畠址2ヶ所、平安時代住居址29棟、掘立柱建物址36棟、中世の住居址及び井戸址4他が、B－d地区より奈良時代住居址8棟、掘立柱建物址10棟、土坑38基他、平安時代住居址1棟、中世掘立柱建物址9棟他が、C地区より平安時代の住居址35棟、掘立柱建物址41棟他が検出されており、時代別総数は、縄文時代の土坑15基、古墳時代の住居址17棟、掘立柱建物址1棟、奈良時代の住居址8棟、掘立柱建物址10棟、土坑38基、平安時代の住居址74棟、掘立柱建物址87棟、土坑30基、中世の住居址4棟、掘立柱建物址12棟[1]等が検出されている。以上のことから、前藤部遺跡及び栗毛坂遺跡C地区に近接した中曽根遺跡は、奈良から平安時代の遺構の存在が十分予想される。

註1　『長野県埋蔵文化財センター年報3・4』（S62・63）㈶長野県埋蔵文化財センター

3　基本層序

中曽根遺跡は田切り地形に挟まれた台地状地形に立地する。遺跡の標高は744m付近でほぼ平坦



第３図　中曽根遺跡基本層序模式図

面に位置している。中曽根遺跡の全体基本層序は下記の５層に分けられる。

第Ⅰ層　10YR6/1　褐灰色土層　耕作土

第Ⅱ層　10YR3/6　暗赤色土層　褐灰色土が混じる田の床土

第Ⅲ層　10YR4/4　褐色土層　きめ細かく粘性があり、ぼそぼそしている。

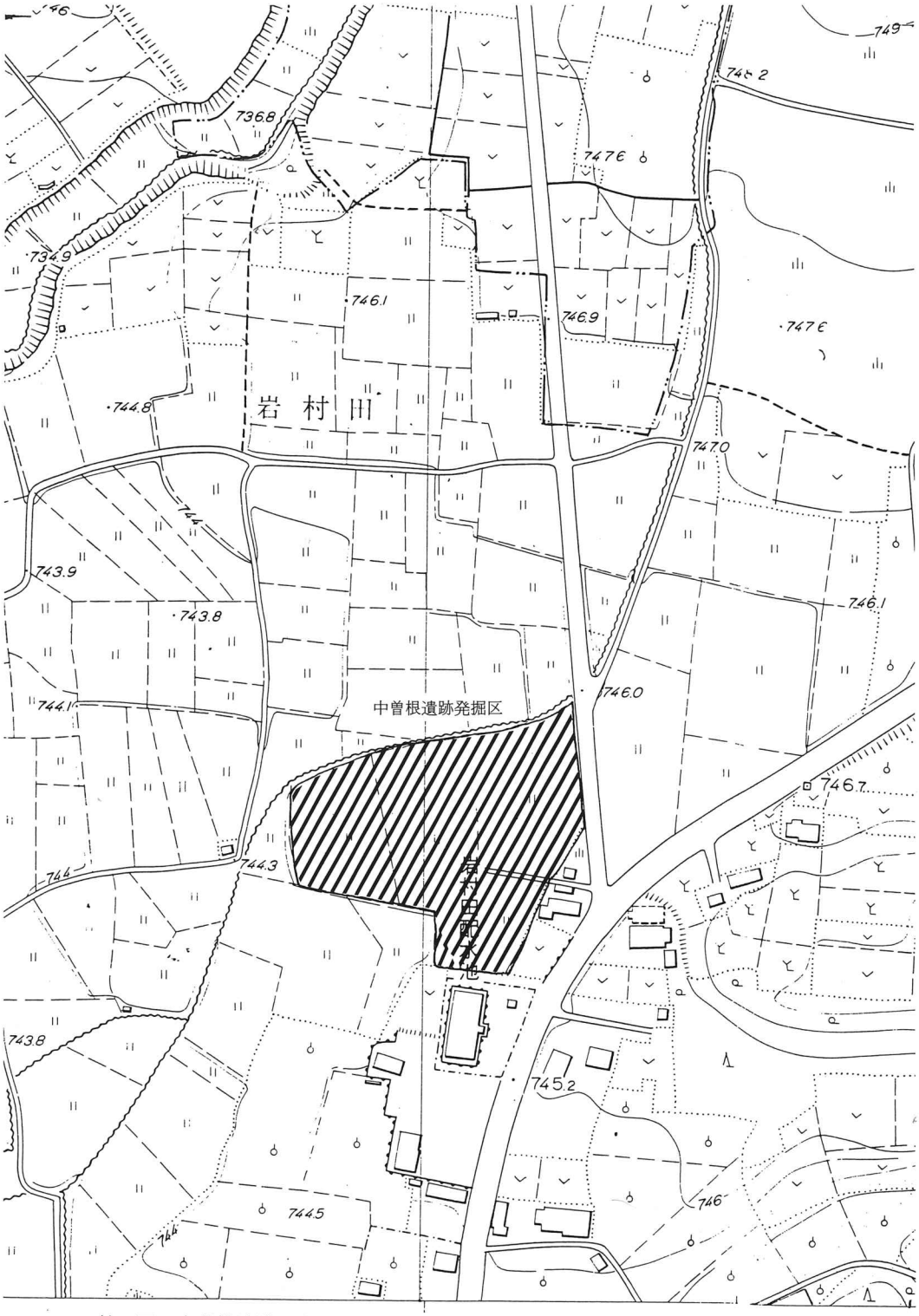
第Ⅳ層　10YR2/1　黒色土層　きめ細かく粘性あり、小礫・パミスを含む。

第Ⅴ層　黄褐色土層　火山灰層でパミスを多量に含む。

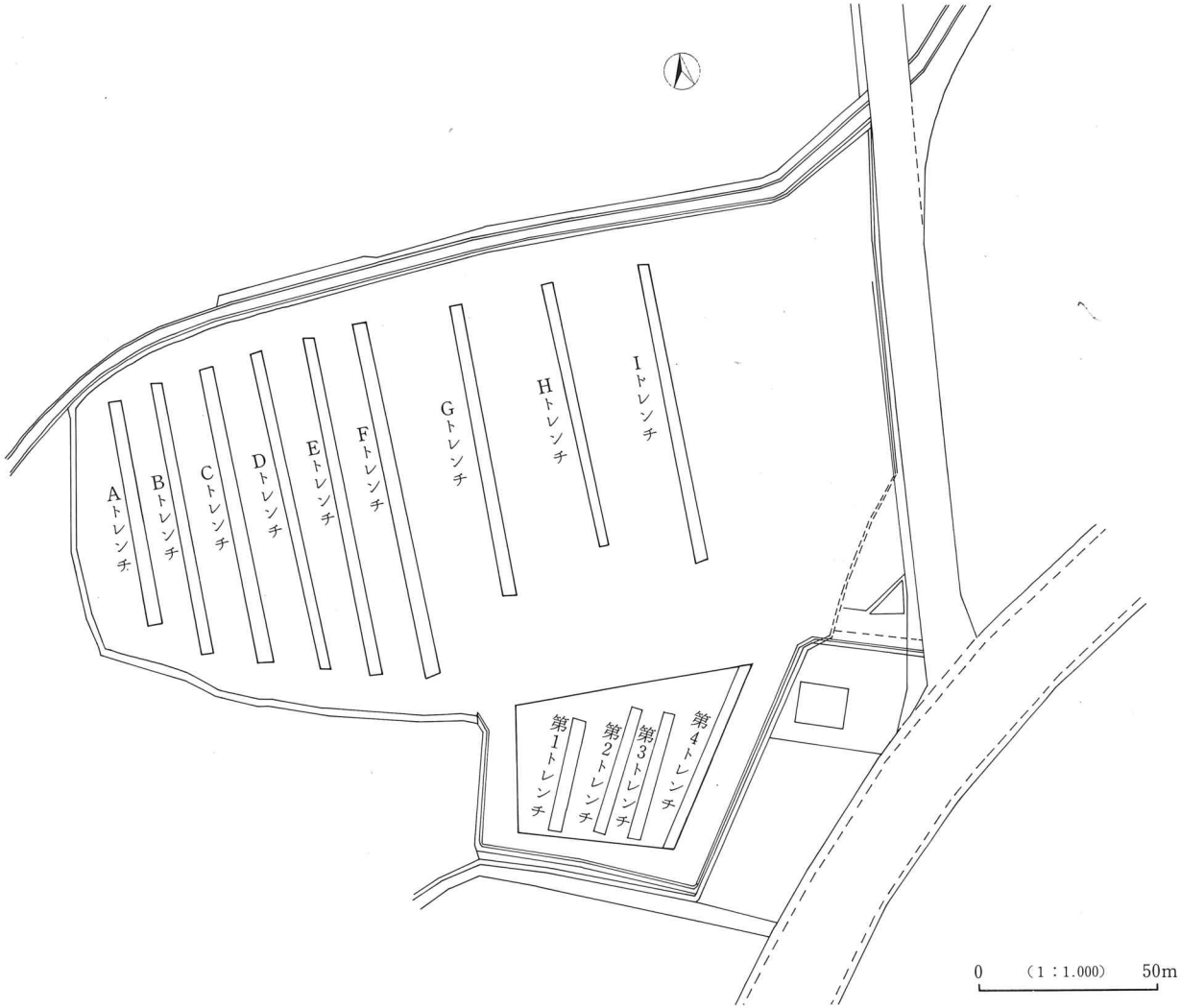
第Ⅰ層と第Ⅱ層は、現代の水田によりできた土層で、第Ⅲ層も撹乱層であるが水田ができる前の畑などにより形成された層と思われる。第Ⅳ層は田切りの低い部分に見られ、かなり古い土層らしい。以上のことから発掘区内は、田切りの低い部分の地形と推側する。

4　調査のまとめ

中曽根遺跡からは、発掘調査に至る動機で述べたように、近接する遺跡から平安時代の住居址が検出されていたため、同様に平安時代の遺構の存在が十分予想されたわけであるが、発掘調査を実施した結果、長野県埋蔵文化財センターが行っている栗毛坂Ｃ地区２区で検出された田切りの続きが当遺跡まで伸びていると考えられ、田切りの低湿地に当ったと思われる。栗毛坂遺跡Ｃ地区においては、田切りと田切りに挟まれた微高地に遺構がほとんど集中している傾向が見られ、田切りの低湿地に当たった中曽根遺跡からは、遺構は検出されなかった。また、遺物の出土も皆無であった。



第４図　中曽根遺跡の地形及び発掘区設定図（１：2.500　佐久市基本図No.4による）



第５図　中曽根遺跡全体図

1．中曽根遺跡遠景（北方より）

2．発掘区全景（北方より）

図版二

1．発掘区全景（南方より）

2．試掘トレンチ全景（南方より）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市
栗毛坂遺跡群　中　曽　根　遺　跡

1987年10月
編集者　佐久埋蔵文化財調査センター
発行者　長野県佐久市教育委員会
印刷所　株式会社佐久印刷所

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書　第10集

FUJI　ZUKA

藤　塚　遺　跡

長野県佐久市塚原藤塚遺跡試掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は昭和62年度新町工場用地進入路新設工事に伴う、埋蔵文化財試掘調査報告書である。

2　調査委託者　　浅科村

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　試掘調査所在地籍及び面積

藤塚遺跡　佐久市大字塚原字藤塚1548—1•3•4、1549、1569—2•3、1570—1•3、1572—1、
（ＴＦＺ）　1573—1、1574、1575—1、1576—1、1577—1・2、1579—1、
1599—1　50（2,902）㎡

5　調査期間

昭和62年９月11日～９月14日・９月16日～10月28日

6　調査団の構成

事務局

佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長　　西沢　正巳

庶務係主査　　畠山　俊彦

庶　務　係　　田中　芳美（臨時職員）

調査団

団　　長　　黒岩　忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　　林　　幸彦（佐久市教育委員会）

羽毛田　卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者　　高村　博文（佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任）

調　査　員　　篠原　浩江（佐久考古学会員）

調査補助員　　神部　妙子

発掘協力者　　小林　幸子

整理協力者　　平林　美津江、宮川　百合子

7　本書の編集・執筆は高村が行った。

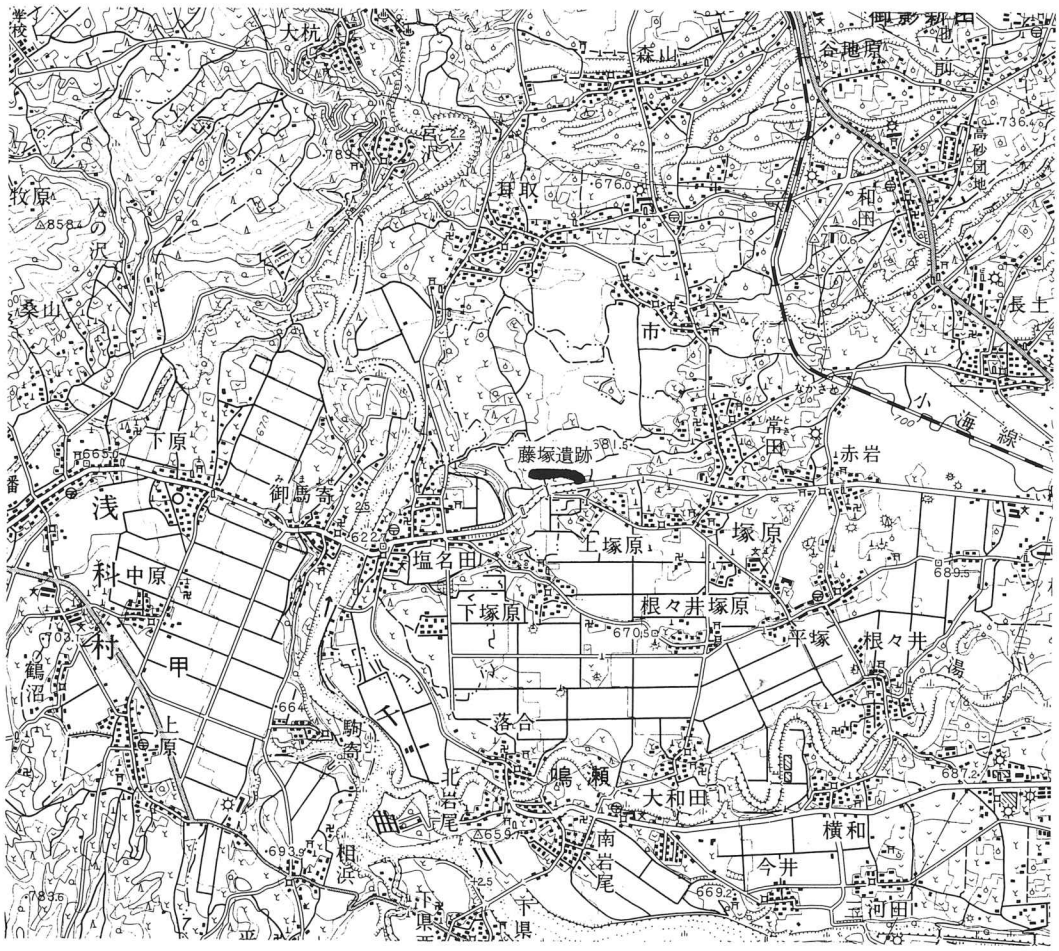
8　本書及び藤塚遺跡のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

1　調査に至る動機

藤塚遺跡は、佐久市塚原に所在し、標高670mを測る台地上に位置する。

藤塚遺跡内には、藤塚古墳群が存在し６基の古墳が確認されており、さらに昭和57年度佐久市教育委員会によって実施された詳細分布調査の際に、弥生時代～平安時代の土器片が表採されている。そのため、藤塚遺跡からは、古墳群と関連して何らかの遺構の存在が十分予想されるところである。

今回、浅科村により昭和62年度新町工場用地進入路新設工事が本遺跡内において計画されたため、佐久市教育委員会が浅科村より委託を受け、佐久市教育委員会からの委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施する運びとなった。



第１図　藤塚遺跡の位置（１：50.000　国土地理院地形図による）

2　試掘調査日誌

9月11日（金）

本日より、重機により道路敷地内の中心付近に幅1.5mのトレンチを掘り始める。本日で重機によるトレンチ掘りは終了する。

9月12日（土）

器材の搬入、テントの設営を行う。標高点の移動を行い、669.1mに設置する。重機により入れたトレンチの全体図を実測しはじめる。

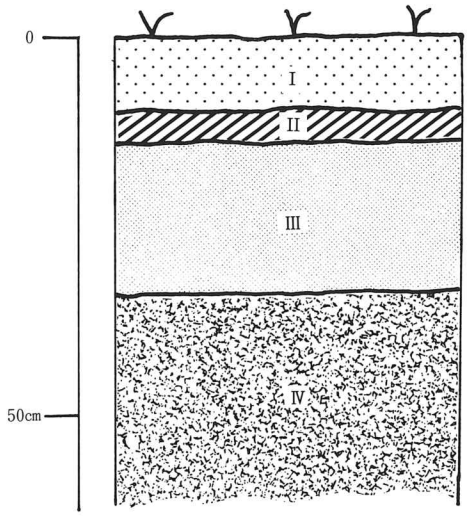
9月14日（月）

トレンチの全体図実測、レベリングを行い終了する。写真撮影を行い、基本土層のセクション図を実測し、すべての作業を終了する。器材・テントを撤収する。

9月16日（水）～10月28日（水）

室内にて報告書作成作業を行い、すべての作業を完了する。

3　基本層序



第2図　藤塚遺跡基本層序模式図

藤塚遺跡が存在する台地の地質は、家地頭第1号古墳発掘調査報告書に執筆された塚原付近の地形・地質から抜枠すると「この地域は、基盤である洪積層、湯川層の上部に、黒斑山（浅間山の第1外輪山）のカルデラ爆発によって噴出した、多量の火山砂・熔岩片や既存の岩片が一時に流下した、塚原岩屑流（泥流ともいう）が覆っており、その末端部にあたっている。厚さ3～5m、東側は湯川の線、西側は近津付近、南縁は、ほぼ千曲川に及ぶ不等辺三角形の地域に分布し、北上部は小海線で、その後の新しい浅間火山の墳出物追分火山灰流に覆われている」（白倉　1976）となっており、基本層序第IV層が火山灰層である。

以下、H区の基本層序を示す。

第Ⅰ層　10YR6/1　　褐灰色土層　粘性なく、小礫を含む。耕作土

第Ⅱ層　2.5YR5/8　明赤褐色土層　粒子粗く、粘性なく、小礫を含む。田の床土

第Ⅲ層　10YR3/1　　黒褐色土層　粒子粗く、ぱさぱさしている。粘性なく、小礫を多量に含む。

第Ⅳ層　10YR7/3　　にぶい黄橙色土層　粘性ややあり、礫を含む。

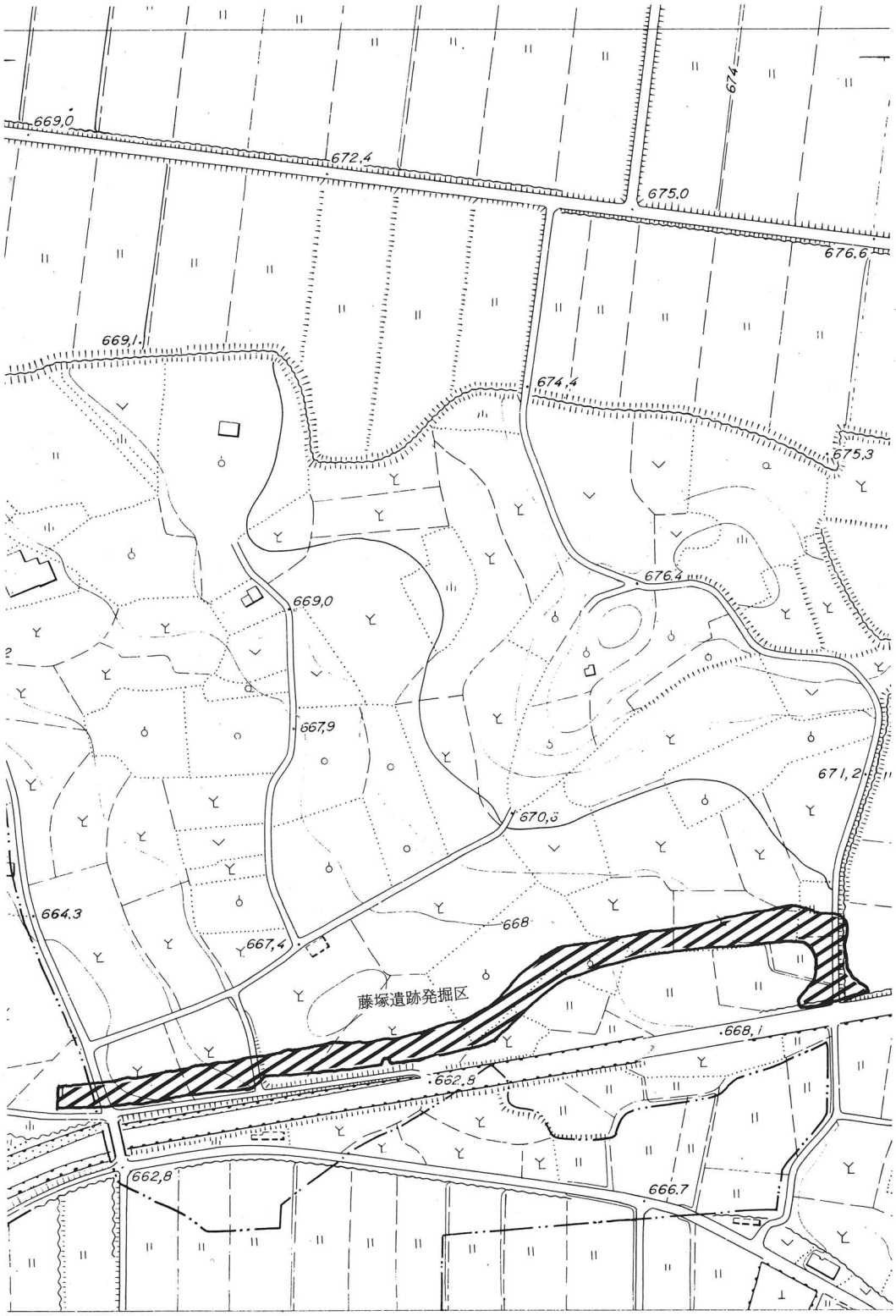
4　調査の成果

今回、試掘を実施した藤塚遺跡は、新設道路内の幅約７m前後の調査のため、遺跡の全容を把握することはできない。遺跡の立地する塚原地帯には、大小100余個以上にも及ぶ半球状・島状の残丘があり、この地方では俗に『塚』と呼んでいる。

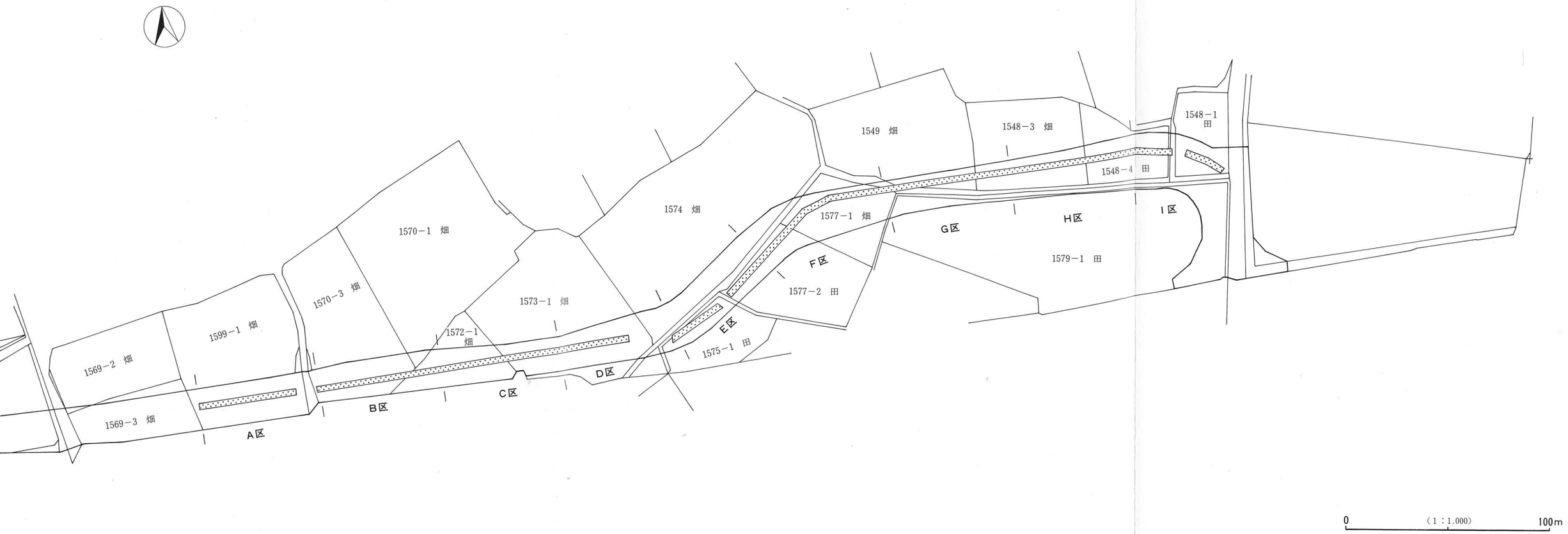
これらの塚は、古墳に利用されたものもあり塚原古墳群として、古くから知られていた。現在は、佐久市詳細分布調査により、藤塚古墳群（６基）、姫小石古墳群（２基）、家地頭古墳群（５基）、大豆塚古墳群（３基）、下大豆塚古墳群（２基）、東池下古墳群（４基）、鷺林古墳群（５基）の計27基の古墳が存在し、佐久市内でも有数の群集墳を形成している。

このため、今回の試掘調査において、当初、古墳群と関連した遺構の存在を予想していたわけであるが、遺構の落ち込みと思われるものはなく、撹乱がほとんどであった。また、遺物も土師器小片が１片と近・現代と思われる陶磁器が数片のみで、ほとんど採集されなかったといってもよい。

今回の試掘によって、この道路幅内には遺構が存在しないものと判断する。



第３図　藤塚遺跡の地形及び発掘区設定図（１：2.500　佐久市基本図No.7による）



第４図　藤塚遺跡試掘トレンチ設定図

1．藤塚遺跡遠景（南方より）

2．A・B区全景（東方より）

図版二

1．B・C・D区全景（東方より）

2．E・F区全景（南方より）

1．G・H区全景（東方より）

2．I区全景（西方より）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書　第10集

宮の上遺跡群

MIYA NO UE

宮　の　上

長野県佐久市横和宮の上遺跡発掘調査報告書

1988

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は長野県佐久建設事務所による昭和62年度国補交通安全事業（歩道設置工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　長野県佐久建設事務所

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査所在地籍および面積　　宮の上遺跡群宮の上遺跡（略号ＹＭＭ）

佐久市大字横和434―１、440―１、450―１・４、444―１、455―３、456―４

459―３、460―４　　150㎡

5　調査期間

昭和62年10月15日～10月24日、昭和62年10月26日～昭和63年２月29日

6　調査団の構成

事務局　　佐久埋蔵文化財センター

所　　長　　西沢　正巳

庶務係主査　　畠山　俊彦

庶　務　係　　田中　芳美（臨時職員）

調査団

団　　長　　黒岩　忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　　林　　幸彦（佐久市教育委員会）

羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者　　小山　岳夫（佐久埋蔵文化財調査センター調査係）

調査　主任　　羽毛田伸博（佐久考古学会員）

高村博文、三石宗一（佐久埋蔵文化財センター調査主任、調査係）

調査補助員　　神部妙子

発掘協力者　　和久井義雄、小林幸子

整理協力者　　平林美津江、宮川百合子

地形・地質・石質指導　　白倉　盛男（佐久考古学会副会長）

灰釉陶器鑑定　斉藤　孝正（名古屋大学助手）

7　本書の編集は小山が行い、執筆は第Ⅱ章第１節を白倉盛男が担当し、他の章については小山が行った。また、遺構写真は小山、遺物写真は畠山が撮影した。

8　本書および宮の上遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査に際して地元の方々には数々のご協力・ご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導、ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

臼田武正、島田恵子、堤　隆、花岡　弘、原　明芳、福島邦男、由井茂也（敬称略五十音順）

凡　　例

1　遺構の略称　　竪穴住居址⇨H、溝状遺構⇨M、土坑⇨D

2　水糸レベルについては各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。

3　挿　　図

1）　重複遺構については、上端のみを実線で示表示した。

2）　縮　尺　　竪穴住居址⇨1/80、溝状遺構⇨1/100、土坑⇨1/60、土器⇨¼、鉄器⇨⅓
写真図版中の土器の縮尺についても上記に準処する。

3）　遺構・遺物実測図に用いたスクリントーンは下記の内容の表現である。

遺構実測図

地山　　カマド

焼土

遺物実測図

須恵器断面　　土師器内面黒色　　暗文

目　　次

例　　言

凡　　例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機……1

第２節　調査日誌……1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　自然環境（地形と地質）……2

第２節　遺跡の歴史的環境……3

第Ⅲ章　基本層序

第１節　基本層序……5

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　検出遺構・遺物の概要……5

第２節　竪穴住居址……6

1）　第１号住居址……6　2）　第２号住居址……12

第３節　溝状遺構および土坑……15

1）　第１号溝状遺構……15　2）　第２号溝状遺構……15

3）　第１号土坑……16

第Ⅴ章　調査のまとめ……16

引用参考文献

挿図目次

第1図　宮の上遺跡の位置及び周辺遺跡分布図……3
第2図　基本層序模式図……5
第3図　宮の上遺跡遺構全体図……6
第4図　宮の上遺跡発掘区設定図……7
第5図　第1号住居址実測図……9
第6図　第1号住居址カマド実測図……9
第7図　第1号住居址出土土器実測図……10
第8図　第1号住居址出土鉄器実測図……11
第9図　第2号住居址実測図……12
第10図　第2号住居址カマド関連部分微細図……13
第11図　第2号住居址出土土器実側図……15
第12図　第2号溝状遺構実側図……16
第13図　第1号土坑実測図……16

写真図版目次

図版　一　1　宮の上遺跡遠景
　　2　宮の上遺跡B地区全景
図版　二　1　宮の上遺跡B地区全景
　　2　第1号住居址
　　3　第1号住居址
　　4　第1号住居址遺物出土状況
　　5　第1号住居址遺物出土状況
図版　三　1　第1号住居址カマド
　　2　第2号住居址
図版　四　1　第2号住居址カマド関連部分
　　2　第2号住居址遺物出土状況
　　3　第1号溝状遺構
　　4　第2号溝状遺構
　　5　第1号土坑
　　6　スナップ
図版　五　1　第2号住居址出土遺物
　　2　第1号住居址出土遺物
　　3・4　第2号住居址出土遺物
　　5　墨書土器
　　6　第1号住居址出土鉄器

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

宮の上遺跡群宮の上遺跡は佐久市横和に所在し、千曲川支流の湯川左岸の第２段丘上に立地する。北側の対岸には弥生時代の大集落また古墳群で名高い北西の久保遺跡、同じ台地上の南側には佐久地方最大の横穴式石室を有する三河田大塚古墳を眺み、佐久市の遺跡の宝庫の中央部に立地していると言っても過言でない。

遺跡群は市内遺跡詳細分布調査によれば縄文・弥生・奈良・平安時代の遺物が採集されており、昭和50年度に行われた本調査地区の南東部にあたる高根遺跡の調査でも弥生時代の遺物が検出されている。

昭和62年度佐久建設事務所によって国補交通安全事業（歩道設置工事）が本遺跡内において計画されたため、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となった。そこで長野県教育委員会文化課・佐久建設事務所、佐久市教育委員会の三者で協議を行った結果、遺跡の破壊やむなきに至り緊急に調査して記録保存する必要性が生じた。そこで佐久市教育委員会が佐久建設事務所より委託をうけ、佐久市教育委員会から委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行う運びとなった。

第２節　調査日誌

昭和62年10月15・16日（木・金）、重機によって調査地区の西側Ａ地区より表土除去、確認面の把握作業を開始し、溝状遺構一基を確認する。続いてＢ地区に入り、落ち込み２箇所を確認する。

10月19日（月）～10月20日（火）　Ａ地区１号溝の掘り下げ・実測、Ｂ地区精査・１号住・２号住・１号土坑の掘り下げ・実測・写真撮影を行う。２号住は調査除外地に入るため、再協議となる。

10月21日（水）　Ａ・Ｂ地区の埋め戻しを行う。２号住は再協議により延長調査をすることになる。

10月22日（木）　重機によって延長部の表土除去、２号住・２号溝の掘り下げ・実測を行う。

10月24日（土）　延長部埋め戻しを重機にて行い、全調査を終了する。

10月27日（火）～昭和63年２月29日（月）　報告書作成作業を行い全調査を完了する。

第II章　遺跡の立地と環境

第１節　自然環境（地形と地質）

宮の上遺跡は佐久平の中心部佐久市大字横和宮の上にある。

佐久平は千曲川の上流沿岸平地で標高700m附近を中心として、北は小諸市、南は南佐久郡佐久町を長軸として南北約18km、東西は佐久市中心部で幅約10kmの長菱形をしている。この長菱形の長い対角線上を千曲川が北に向って流れており、短い対角線は佐久市地域にあり幅としては最も広い部分にあたっている。東側は佐久山地の荒船山(1422m)を主峯とし兜岩山、物見山、八風山等が南北に連なり群馬県との分水嶺県界を作っており妙義荒船佐久高原国定公園となっている。西側は八ケ岳蓼科山の2500m以上のフォッサマグナ内に噴出した富士火山帯の高峰が南北にならび諏訪地方との境界をなして、これも八ケ岳中信高原国定公園となっている。佐久平は古来から交通の要地にあたり、わが国の東西交通路である東山道・中仙道・中山道、日本列島縦貫道路としての北国街道・善光寺街道・佐久甲州街道等の通過地であった。従って周辺山地には多くの峠路が開かれていた。東の碓氷峠・香坂峠・内山峠・田口峠・余地峠・十石峠、西の麦草峠・大石峠・大河原峠・雨境峠・大門峠などがその代表である。

佐久平と総称しているが、地質学的成因については南北二区分に別れている。境界線は志賀川が滑津川下流と合流して千曲川に注ぐ東西線を境として滑津川河床で標高650m、北岸段丘上で680m、比高30mの断崖が続いている。これは旧南北佐久郡境でもあり、南部を野沢平、北部を岩村田台地と明らかな相違を見せている。昭和36年この郡界を越えて東村・浅間町・中込町・野沢町の一村三町が合併して佐久市として誕生したわけで、佐久市が佐久平の中心部を占めている。

南部野沢平は主として千曲川の氾乱原沖積地と内山川の谷口扇状地で全体的には河床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、用水も古くから拓かれて安定し土地肥沃なために水稲多収穫地帯である。

北部は中込原から岩村田中佐都地区で浅間火山の山麓末端の台地状平地で基盤には浅間火山第一次外輪山黒斑山の大噴火による塚原泥流が中佐都附近で流れ山を百余形成しており、その上部へは第二次外輪山前掛山の長期の活動に基く追分第一軽石流（P_1）が厚く被っている。この層は厚い部分は20～30mの層厚を示し軽石と火山砂火山灰で構成されており新期火山噴出堆積層のために風化も進まず凝結力も弱いために雨水による浸蝕がはげしく、流水による浸蝕谷〝田切り地

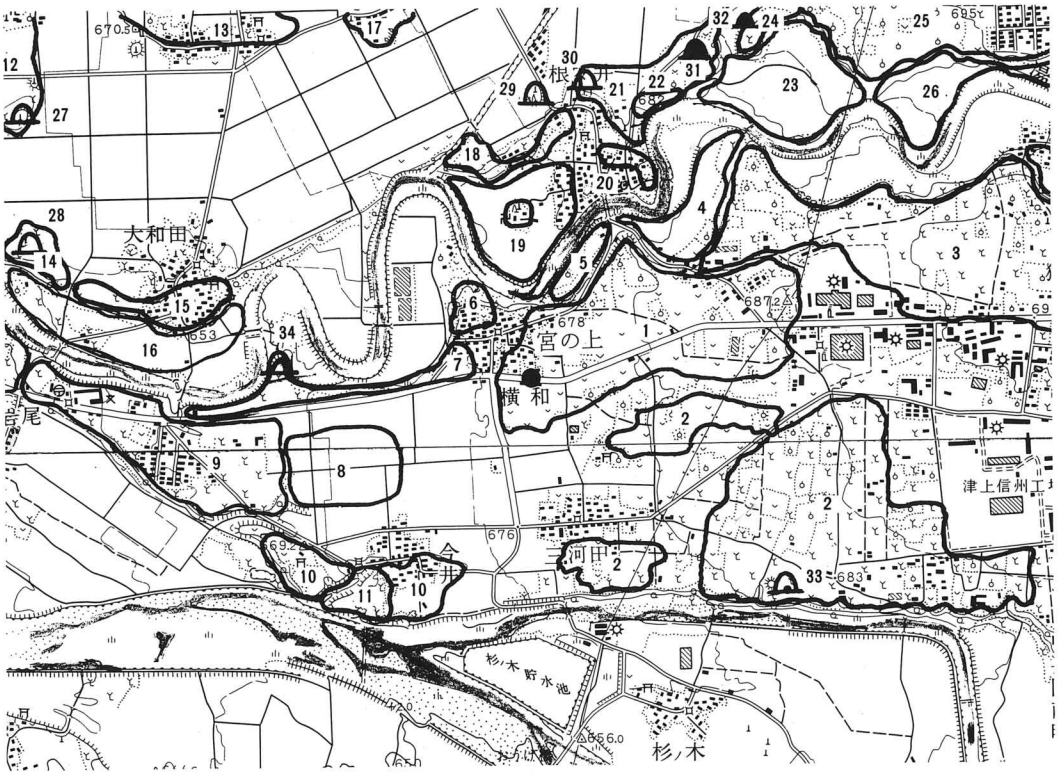
形″が見事に発達し、御代田から岩村田地区まで、西部は小諸懐古園附近まで深い垂直の谷を形成している。この田切り地形の谷底は常時地下水が湧出しており、弥生時代から最初に稲作が行われたであろうと考えられている部分でもある。このP_1層の地表面には凸凹もあり湯川を堰き止めた湿地にその後の火山灰砂、流入軽石礫が堆積したものが所謂新期の〝湯川層″として上面を覆っている。これらの地層が佐久平北半の堆積層序となっており、特に中込原附近では地下水層は極端に低く生活用水が得られなかったために佐久市が誕生して市役所が新築され、佐久水道が新設されるまでは人家もなく桑畑、野菜畑のみであった。

宮の上遺跡は中込原段丘上の湯川左岸の遺跡で発掘によって黒褐色表土層（全体層序第Ⅰ層）45～50cm、ローム層（第Ⅱ層）20cmそれより下部は湯川層湿地堆積層（第Ⅲ層）で1.1mまでは確認されたが下底面は未確認である。

（白倉　盛男）

第２節　歴史的環境

宮の上遺跡群は湯川と滑津川にはさまれた東西に細長い広大な台地上にあり、南北450m、東



第１図　宮ノ上遺跡の位置及び周辺遺跡分布図（１：25,000国土地理院地形図による）

西1250mの規模を有する大遺跡群である。本遺跡群内における発掘調査は、昭和50年度に高根遺跡（1）で行なわれているが、狭小な調査面積であったためか遺構は検出されなかった。このため、佐久市遺跡詳細分布調査で縄文～平安時代の遺物が採集されているものの、本遺跡群の実像は極めて不鮮明である。このことは近接する寺畑（3）、寄塚（7）、白山（9）遺跡群も同様であり、湯川右岸の当地域における様相を知る手掛りは今井西原遺跡（8）において検出された古墳時代前期・後期、平安時代の住居址計7棟等のみである。従って、本調査において検出される遺構の時期・性格について予想することは極めて困難であった。

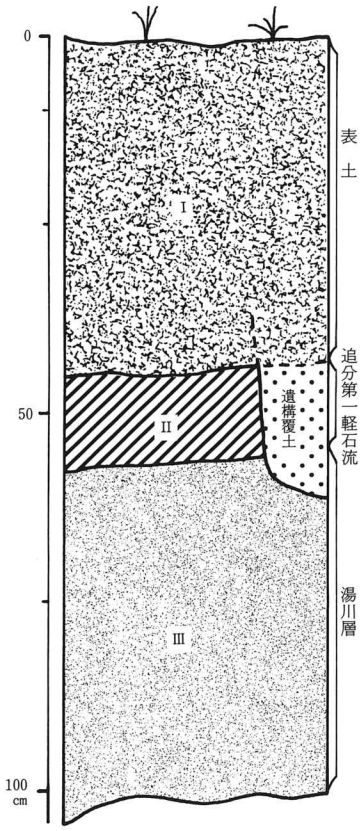
一方、対峙する湯川右岸地域はここ20年来、盛んに発掘調査が行われ、弥生～平安時代の集落址、墓址の一大密集地であることがわかってきた。第1図に示されている北西の久保(24)、一本柳(25)遺跡もその代表例である。本遺跡を含めた左岸地域が右岸地域の繁栄した様相と比べてどのような関係、相違を示すのか、今後の調査の進展に多大な期待が寄せられるところである。

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
					縄	弥	古	奈	平	中	
1	240	宮の上遺跡群	横和字宮の上・一本松・南辰の口・西供養塚・湯の上・高根・柳原・芝宮・屋敷・十三部他	湯川第2段丘	○	○		○	○		昭和50年度一部試掘　高根遺跡本調査　宮の上遺跡
2	241	中原遺跡群	今井字大塚・新田前他　横和字下土堂他中込字梨の木・大塚・曲坂・中原他	滑津川2段丘	○	○	○	○	○	○	昭和62年度一部発掘調査
3	107	寺畑遺跡群	根々井字寺畑他、猿久保字下原他	2段丘		○	○	○	○		
4	106	諏訪分遺跡群	根々井字諏訪分・北諏訪分	1段丘		○	○	○	○		
5	242	赤石河原遺跡	根々井字赤石原、横和字堰口他	1段丘		○			○		
6	233	北久保遺跡	横和字北久保	1段丘			○	○	○		
7	231	寄塚遺跡群	横和字寄塚・鶴巻	2段丘		○	○	○	○	○	
8	234	今井西原遺跡	今井字九反田他	2段丘		○	○	○	○	○	昭和49年度一部発掘調査
9	230	白山遺跡群	鳴瀬字白山他・三河田字下原	2段丘	○	○	○	○	○		
10	235	今井宮の前遺跡	今井宮の前・面他	2段丘					○	○	
11	236	今井城跡	今井字城・前田	2段丘						○	
12	84	狐塚遺跡	塚原字狐塚	台地	○				○		
13	87	道添遺跡	塚原字道添・立石・伊勢塚他	台地					○		
14	225	北道見遺跡群	鳴瀬字北道見・南道見	2段丘		○	○	○	○	○	
15	226	大和田屋敷遺跡群	鳴瀬字屋敷・ついじ	2段丘		○	○				
16	227	大和田遺跡群	鳴瀬字大和田・川原端他	1段丘	○	○	○				
17	88	塚原屋敷添遺跡	塚原字屋敷添・屋敷	台地					○		
18	93	日向屋敷遺跡	根々井字日向屋敷	2段丘		○	○	○	○		
19	94	根々井居屋敷遺跡	根々井字居屋敷	1段丘		○	○	○	○		
20	97	伊勢田遺跡	根々井字伊勢田	1段丘		○					
21	96	鳴澤遺跡群	根々井字鳴澤・東坂上他	1段丘	○	○	○	○	○		
22	108	根々井東原館跡	根々井字東原・東坂上他	1段丘						○	
23	99	中西の久保遺跡群	岩村田字中西の久保・東西の久保他	1段丘		○	○	○	○		
24	98	北西の久保遺跡	岩村田字北西の久保	2段丘		○	○	○	○	○	昭和44・45・54・57・60年度発掘調査により台地上全面破壊
25	105	一本柳遺跡群	岩村田字東一本柳・下福王寺・東大門先北一本柳・東一本柳・西一本柳他	2段丘		○	○	○	○	○	昭和43・47年度一部発掘調査
26	100	中鳴澤遺跡群	岩村田字中鳴澤	1段丘		○	○	○	○		
27	90	狐塚古墳	塚原字狐塚2141―1	台地			○				
28	238	道見塚古墳	鳴瀬字北道見2223	2段丘			○				
29	109	根々井大塚古墳	根々井字塚越1179―1	2段丘			○				
30	110	姫宮塚古墳	根々井字姫宮1141	2段丘			○				
31	111	上鳴澤古墳群	根々井字上鳴澤888―1,913―1,921―1	2段丘			○				1～3号まで確認
32	116	北西の久保古墳群	岩村田字北西の久保	2段丘			○				17基は5C末～6C、1基は7C
33	244	三河田大塚古墳	三河田字大塚414―5	2段丘			○				
34	239	寄塚古墳	横和字寄塚592	2段丘			○				
35	95	根々井館跡	根々井字居屋敷	1段丘						○	

第Ⅲ章　基本層序

第１節　基本層序



第２図　基本層序模式図

宮の上遺跡は湯川左岸の２段目の段丘上に立地し、標高は676～678mをはかり、今回調査地区は東から西へ向って緩い傾斜を示す。

遺跡の基本的な層序は第２図に示したとおりで、表土第Ⅰ層は45cm内外と比較的に厚い堆積を示す。第Ⅱ層・火山灰層は10cm強の薄い堆積で、以下は〝湯川層〟と言われる砂粒主体層が厚く堆積しているが、この層厚については未確認である。

遺構の確認は第Ⅱ層上において確実にでき得るが、第Ⅰ層と遺構覆土は酷似しており、確認面のレベルがさらに高くなる可能性は強い。

本遺跡南東に約1.2km離れた位置の梨の木遺跡の遺構覆土も表土と酷似しており、このようなあり方は当台地上の遺跡に共通することかもしれない。

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　検出遺構・遺物の概要

今回の調査区は遺跡群の西側中央の全長170m、幅２mの範囲である(第４図)。生活道路確保、ガス・水道管の保全のため、実質調査区は限定され、西側をＡ地区、東側をＢ地区として調査を行った（第４図)。Ａ・Ｂ地区以外は立ち合い調査を実施した。これらの調査区から検出された遺構・遺物の概要は下記の通りである。

遺構

Ａ地区

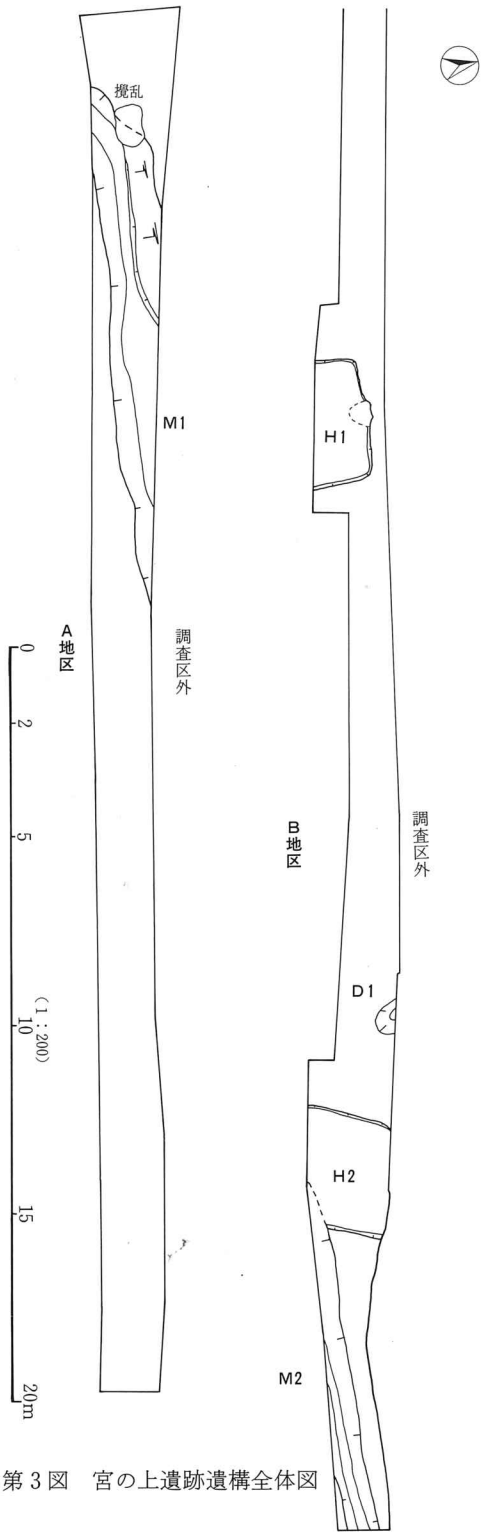
溝状遺構	１条	中世以降

Ｂ地区

竪穴住居址	２棟	平安時代
溝状遺構	１条	時期不明
土　　坑	１基	時期不明

遺物

土器	平安時代	土師器	甕・坏
			高台付坏
		須恵器	甕・坏
		灰釉陶器	長頸壺・椀
	中　　世	内耳土器	土鍋
鉄器	平安時代	刀　　子	



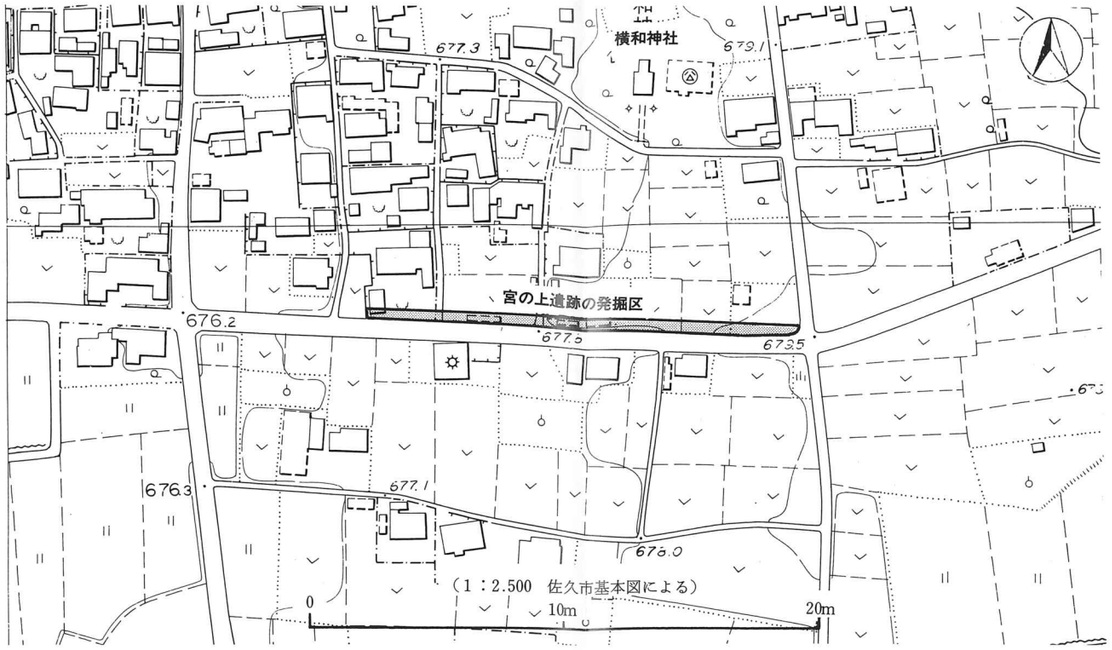
第３図　宮の上遺跡遺構全体図

第２節　竪穴住居址

１）　第１号住居址

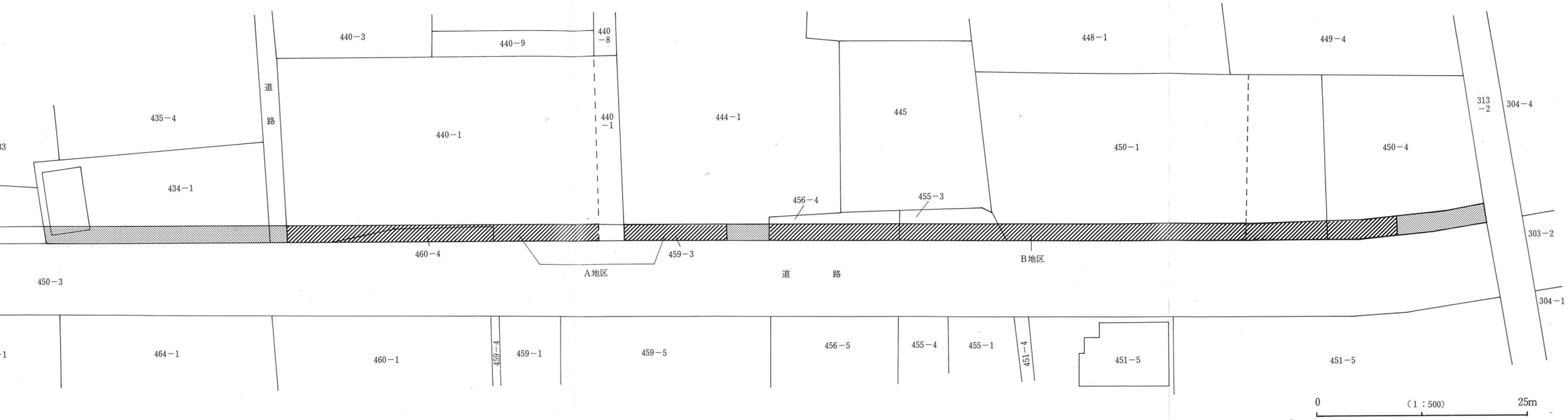
遺構（第５・６図、図版二・三）

本住居址はＢ地区の中央西寄りから検出さ



発掘調査箇所

立ち合い調査箇所



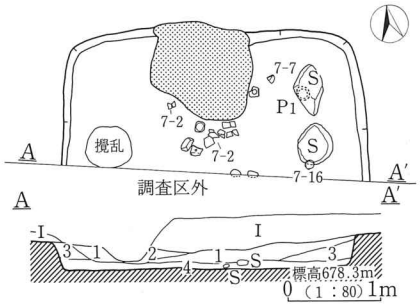
第４図　宮の上遺跡発掘区設定図

れた。他遺構との重複関係はもたないが、南半分が調査区外にあるため、未調査である。

プランは東西長314cmが計測できる以外は不明であるが、該期の住居址としてはやや小型の方形を呈していたものと推測される。長軸方位についても不明であるがおおむね南北方向に近いとみて大過ない。

覆土は四層からなる。1～3層は主体土がほぼ同様で耕作土に近い。4層は床面上に10cm内外の厚さで一様に堆積し、炭化物を含む。

確認面からの壁高は16.5～29.5cmをはかり、床面からの立ち上がりは急である。壁体は地山第II層をそのまま利用したと考えられ、堅固に構築されている。壁溝は検出されなかった。



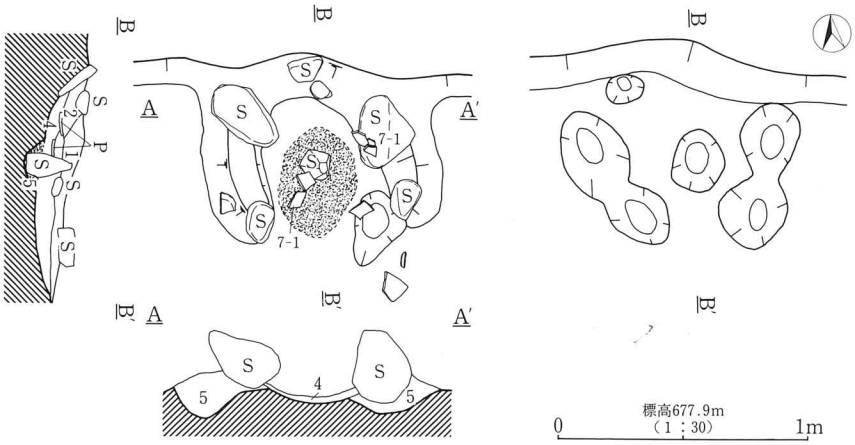
I. 10YR3/2 黒褐色土 ∅1cm内外の小礫、∅5mm内外のパミス多量に含、粘性弱い。
1. 10YR3/3 暗褐色土層 褐色土を基調にローム粒、パミス混、粒子やや粗い。
2. 10YR2/3 黒褐色土層 黒褐色土を基調にローム粒、パミス混、粒子やや細、やや粘性あり。
3. 10YR3/4 暗褐色土層 1層に似る。壁の崩落層。
4. 10YR2/2 黒褐色土層 黒褐色土を基調に微量のローム粒子混、炭化粒、炭化物含、粒子やや細、粘性有り。

第5図　第1号住居址実測図

床面は地山第II層上に褐色土を極く薄く敷いて叩きしめた「叩き床」がほぼ全面に認められる。おおむね平坦に構築されているが、堅固な状況とは言い難く、やや軟弱である。

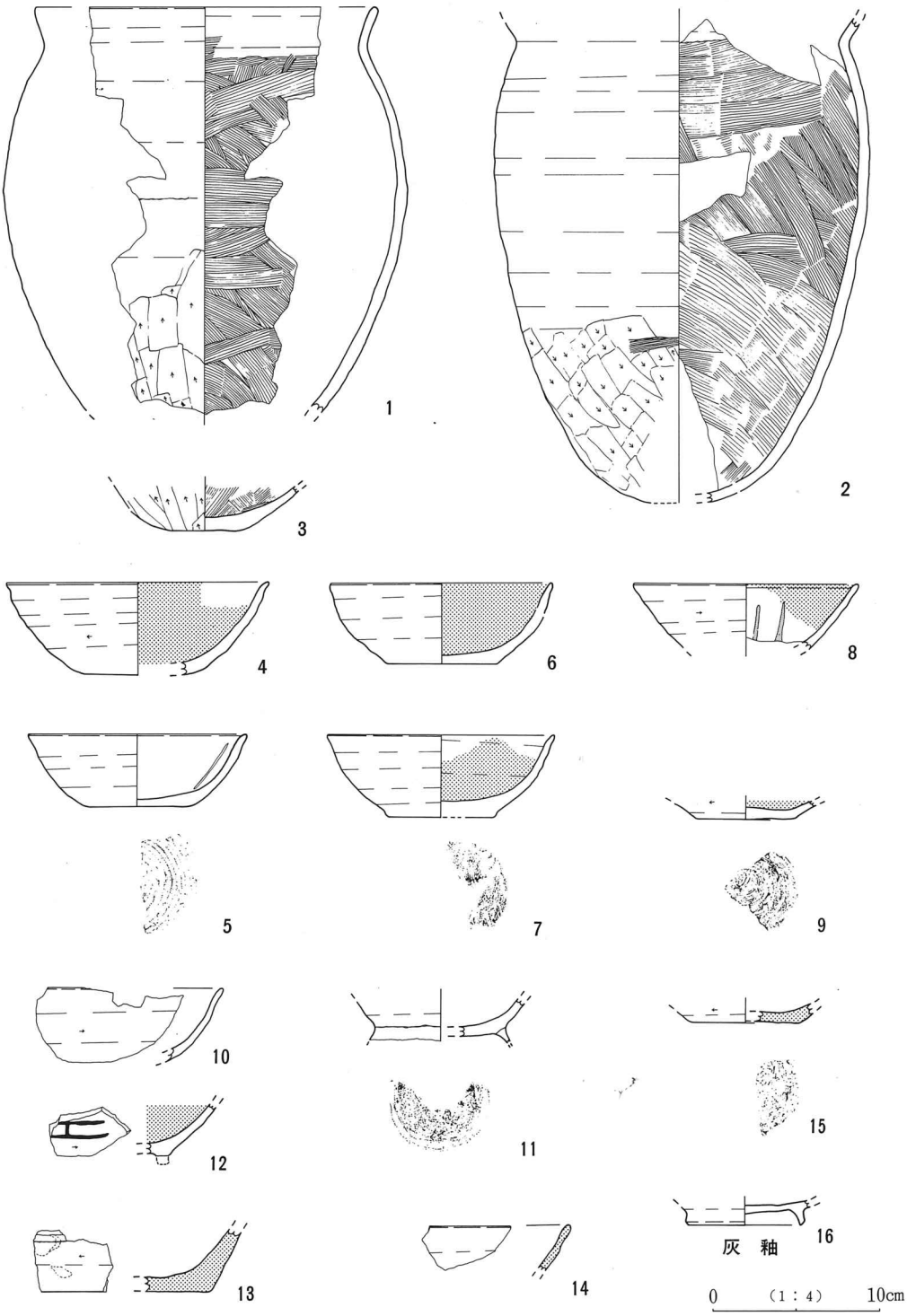
ピットは北東コーナー部から1個検出されたのみで、柱穴であるかは判断しかねる。13×15cmの円形を呈し、7cmの深度を有する。

カマドは北壁ほぼ中央部に構築され、天井部を除きほぼ良好な遺存状態である。規模は焚口～煙



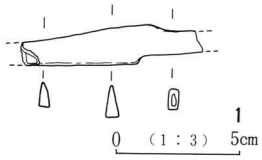
1. 7.5YR3/4 暗褐色土 暗褐色土を基調に焼土と7.5YR4/1褐灰色土(粘土)含む。天井部崩落によるもの。やや粘性有、粒子やや粗い。
2. 7.5YR4/2 灰褐色土層 暗褐色土と7.5YR4/1褐灰色土(粘土)混、粒子やや細かい。
3. 7.5YR2/1 黒色土層 黒褐色土を基調、炭化粒、炭化物含む。
4. 7.5YR3/2 黒褐色土層 黒褐色土を基調に、灰、焼土、炭化粒を含、粒子やや粗い。
5. 10YR3/4 暗褐色土層 暗褐色土に多量のローム粒混、粒子粗く、ぱさぱさとしている。カマド構築時の補強土及び埋土。

第6図　第1号住居址カマド実測図



第７図　第１号住居址出土土器実測図

道部までの長さ85cm、袖部95cmを測る。煙道部は北壁中央を緩らかな山形に僅かに掘り込み、偏平な溶結凝灰岩を当て補強する。袖部は東西両脇の床面に2個一対のピットを掘り、その上にローム粒混じりの暗褐色土（第5層）を馬蹄状に築いて形造られる。構築に際して袖の芯には大型の溶結凝灰岩・軽石を東西両側に各2個ずつ納め補強している。天井部は崩壊・流出が著しく形状を留めないが、1・2層中の褐灰色粘土を基調に築かれたようで、安山岩などが補強材に用られたようである。火床部は両袖内の床面上に44×31cmの範囲で認められる。真赤に焼け込んだ状態で、中央やや北寄りには小ピットを掘り込み、五角錐状に面取された軽石を直立させ支脚石を設けている。カマド底面には土器片を多量に含んだ炭化物・灰（第3・4層）が10cm内外堆積している。



第8図　第1号住居址出土鉄器実測図

遺物の出土状態　遺物はカマド内、その周辺に集中分布し、灰釉椀のみ住居西壁寄りの覆土上層部に分布する。いずれも破損品で散逸した状況を示すものが多い。

第2表　第1号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形および器形の特徴	調整	備考
7－1	土師器甕	(20.0) 〈24.0〉 —	口縁部「く」の字状に緩く、短く外反し、胴部はふくらみ砲弾形を呈する。	内)口～頸部ロクロヨコナデ、以下横斜位のハケメ調整 外)口～胴部上・中位はロクロヨコナデ、以下へラケズリ	胎土　密、焼成　良好 色調　7.5Y8／4(浅黄橙色) 破片実測A No.8・12、フク土
7－2	土師器甕	— 〈28.5〉 —	胴部は砲弾形を呈する。	内)口～頸部ロクロヨコナデ、胴部上位細かい横斜位のハケメ調整、胴下位粗いハケメ調整。 外)口～胴部中位ロクロヨコナデ、下位へラケズリ	胎土　密、焼成　良好 色調　7.5Y6/8（橙色） 回転実測A No.5・6、カマド
7－4	土師器坏	(15.6) 〈5.5〉 (7.0)	口縁部内弯気味に開き、端部で短く外反する。底部は厚くやや丸味を帯びる。	内)口縁部横位、体部縦位の丁寧なへラミガキ、大部分、黒色処理されるが口縁端部の一部赤色を呈する箇所あり。 外)ロクロヨコナデ、底部手持へラケズリ	胎土　密、焼成　良好 色調　5YR7/6（橙色） 回転実測B カマド、フク土
7－5	土師器坏	(12.8) 4.4 (6.6)	口縁～体部内弯気味に開き、端部で僅かに外反する。 底部糸切り	内)ロクロヨコナデ、2本一組の十文字状暗文 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　5YR7/6（橙色） 回転実測B　カマド
7－6	土師器坏	(13.0) 4.8 (6.5)	口縁～体部内弯気味に開く 底部糸切り	内)暗文風の放射状へラミガキ、全面に黒色処理されるが、所々に赤色の付着物あり。 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　10YR3/3（暗褐色） 回転実測B　カマド
7－7	土師器坏	(13.5) 4.9 (6.4)	口縁～体部内弯気味に開き、端部で外反する。 底部糸切り	内)ロクロヨコナデ後、粗いへラミガキ 黒色処理される。 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　2.5YR5/8(明赤褐色) 回転実測B　No.2、カマド
7－8	土師器坏	(12.2) 〈3.9〉 —	口縁～体部直線的に開く。	内)ロクロヨコナデ、部分的に黒色処理されるが研磨されない。暗文あり 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　5YR7/6（橙色） 回転実測B　カマド
7－9	土師器坏	— 〈1.1〉 (6.8)	底部糸切り	内)ロクロヨコナデ、黒色処理 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　2.5Y6/8（橙色） 回転実測B　フク土
7－10	土師器坏	— 〈4.4〉 —	口縁～体部内弯気味に開き、端部で僅かに外反する。	内)黒色処理され、粗いへラミガキが施される。 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　5YR7/6（橙色） 破片実測B　カマド
7－11	土師器高台付坏	— 〈2.8〉 —	底部へラケズリ、貼付高台	内)ロクロヨコナデののちへラミガキ 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　10R5/6（赤色） 回転実測B　フク土
7－12	土師器高台付坏	— 〈2.9〉 —	貼付高台	内)ロクロヨコナデ、黒色処理ののち研磨 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 回転実測B　フク土 体部に判読不明の墨書
7－13	須恵器甕	— 〈3.7〉 —	底部平底	内)ロクロヨコナデ、斜位のナデ 外)指おさえ	色調7.5Y5/2(灰オリーブ色) 破片実測B　フク土
7－14	須恵器坏	— 〈2.7〉 —		内外面ともにロクロヨコナデ	色調　2.5Y5/3（黄褐色） 破片実測B　カマド
7－15	須恵器坏	— 〈4.1〉 (6.4)	底部　糸切り	内外面ともにロクロヨコナデ	色調　2.5Y5/3（黄褐色） 回転実測B　フク土
7－16	灰釉皿	— 〈1.3〉 6.6	貼付高台、断面三角形を呈する。	内外面ともにロクロヨコナデ	色調　7.5Y7/1（灰白色） 完全実測　No.1

遺物（第７・８図、図版五）

土師器・須恵器・灰釉陶器、鉄器などがある。それぞれ12点・３点・１点・１点を図化した。その他の破片も土師器の占める割合が高く、須恵器・灰釉陶器は少ない。

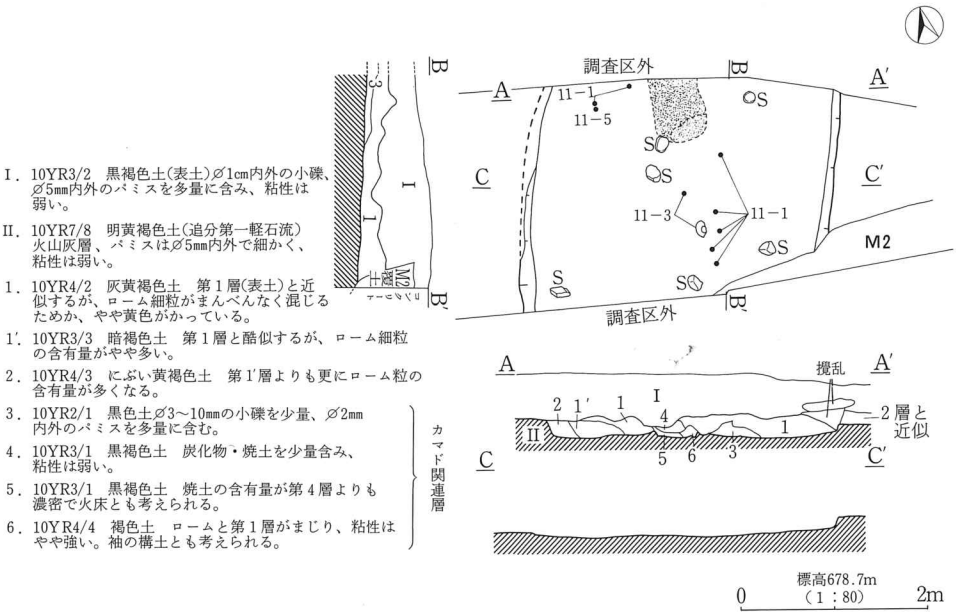
土師器の器種には甕・坏・高台付坏がある。甕７－１・２は口～胴部中位までロクロ調整胴下位～底部までヘラケズリされる。図化できなかった破片資料もおおむね１・２と同じ器形になると考えられ、所謂「武蔵型」甕は認められない。坏は口径15.6cm、器高5.5cm、底型7.0cmのやや大型の７－４と、口径13cm内外、器高4.5cm内外、底径6.5cm内外の７－５・６・７・８がある。６～10は内面黒色処理され、３・４はされない。黒色処理の状態はやや粗く、丁寧に研磨されるものはほとんどない。高台付坏７－11・12は形態不明で、11は内面研磨、12は黒色処理、研磨される。須恵器の器種は甕・坏７－13～15があるがいずれも細片である。灰釉陶器は椀があり、断面三角形の貼付高台を有する。光ケ丘１号窯期に比定される。この他、鉄器刀子８－１がある。

２） 第２号住居址

遺構（第９・10図、図版三・四）

本住居址はＢ地区の東側から検出され、南・北両端が調査区外にあり、また南東側も第２号溝状遺構に破壊されている。

プランは東西311cmをはかり、第１号住居址とほぼ同規模の方形か長方形を呈するであろう。



第９図　第２号住居址実測図

覆土は大略で二層からなる。1・1′・2層は基本層序第Ⅰ層と主体土が酷似する。北側の中央部に堆積する3～6層は、炭化物、焼土、ローム、粘質土などで構成され、カマドに関連する層序と考えられる。

確認面からの壁高は7～16cmをはかるが、西壁北側は遺構検出時に削平されてしまっている。壁体は黄褐色ローム層（第Ⅱ層）をそのまま利用したと考えられ、床面からの立ち上がりは緩い。構築状態はやや軟弱である。

壁溝は検出されなかった。

床面は地山の黄褐色ローム層（第Ⅱ層）を平坦に掘り窪めた後、褐色土を極く薄く全面に埋め戻して叩きしめた「叩き床」が施されている。おおむね平坦に構築されており、ほぼ全面にわたって堅固である。ピットは検出されなかった。

カマドは北壁中央にあると考えられる。北側の中央部には先述したようにカマドに関連すると考えられる土の堆積があり、構材と考えられる焼石が散乱し、数個の浅いピット、火床とも考えられる焼土の広がりが認められた。

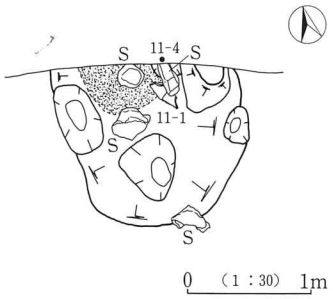
遺物の出土状態　遺物はカマド内、カマド前方部の床面上、及びその直上に集中分布する。土師器甕11―1のように住居内各所に広く散在するものもあり、多くは破損したのちに投棄された遺物とみられる。

遺物（第11図、図版五）

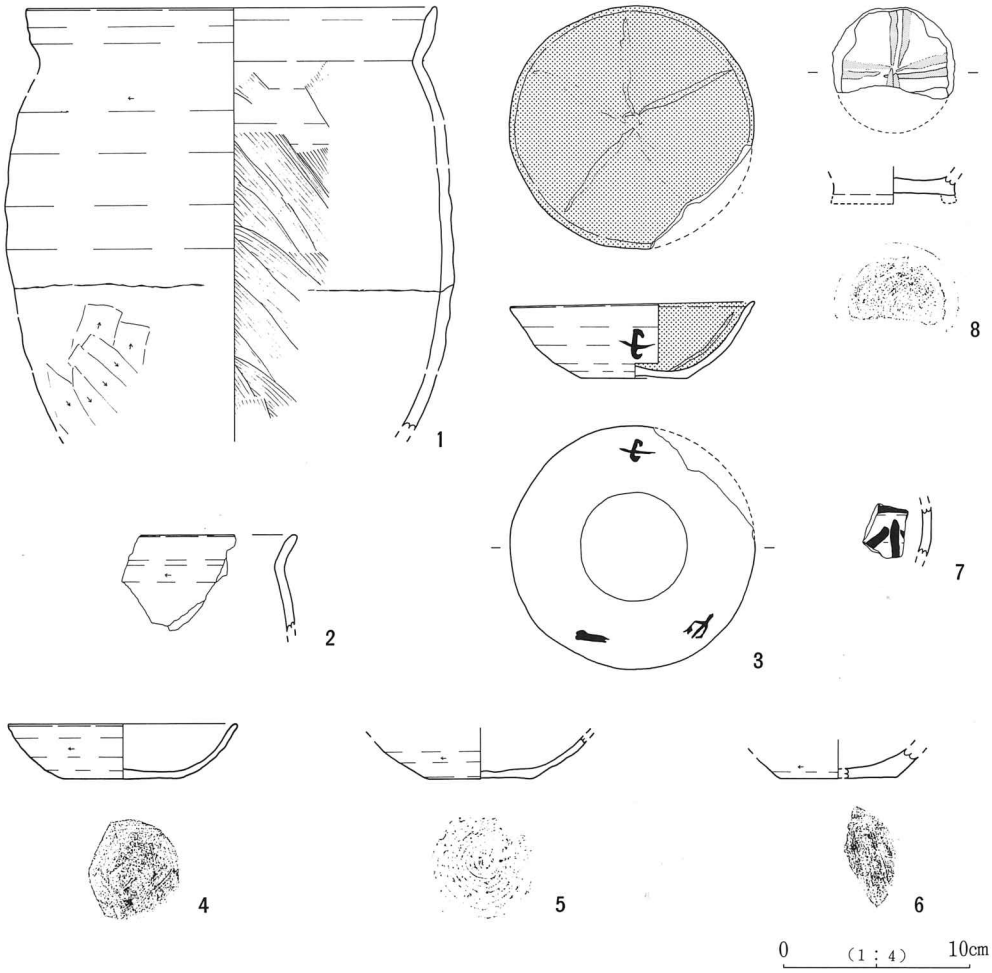
土師器・須恵器・灰釉陶器があり、土師器の占める割合が圧倒的に高く、須恵器、灰釉陶器は極く僅かでしかも細片のみである。図化できたのは土師器6点のみである。

土師器の器種には甕・坏・高台付坏がある。甕11―1は口縁部が肥厚し、受口状に直立し、胴部は砲弾形を呈する。口縁～胴部中位までロクロ調整、下位はヘラケズリが施される。その他、図化できなかった破片もこれとほぼ同じ器形のものばかりである。11―2は口縁部が「く」の字状に短く屈曲する小型品と考えられ、ロクロ調整が施されている。坏11―3～6はいずれもロクロヨコナデが施され、底部は3～5が手持ちヘラケズリ、6が回転糸切りのまま未調整である。また、3は黒色処理されるが他はされない。墨書は3・7にみられ、3は記号状の墨書が3箇所に7は判読不明な文字がみられる。高台付坏11―8は内面に黒色処理が施される。須恵器の器種には坏、灰釉陶器の器種には長頸壺と考えられるものがあるが、いずれも細片で図化はできない。このため、灰釉の年代・生産地についても不明確である。

細片であるが、第1号住居址と接合関係をもつ資料があるため、本址の所産は1号住に近いと思われる。



第10図　第2号住居址
カマド関連部分微細図



第11図　第２号住居址出土土器実測図

第３表　　第２号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形および器形の特徴	調整	備考
11－1	土師器 甕	(21.8) 〈22.5〉 —	口縁部は肥厚して受口状に直立し、胴部はふくらみ砲弾形となる	内)口～頸部はロクロヨコナデ、以下は横斜位のハケメ調整 外)口～胴部上位はロクロヨコナデ、以下は縦位のヘラケズリ	胎土　密、焼成　良好 色調　5YR7/4(にぶい橙色) 回転実測A　No.1・2・7・8・9・11・12・13、フク土
11－2	土師器 甕	— 〈5.1〉 —	口縁部短く外反する。	内外面ともにロクロヨコナデ	胎土　粗い、焼成　良好 破片実測B　フク土
11－3	土師器 坏	13.0 4.0 5.6	口縁～体部内弯気味に開き、端部で僅かに外反する。 底部は糸切りののち手持ちヘラケズリ。	内)全面黒色処理。口縁端部のみヘラミガキ、放射状暗文５本あり。 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　10YR8/4(浅黄橙色) 完全実測　体部３箇所にNo.10・18　記号的墨書
11－4	土師器 坏	(12.2) 2.9 6.0	口縁～体部内弯気味に開き、端部はやや肥厚する。器高は低い。 底部手持ちヘラケズリ全面に施す。	内外面ともにロクロヨコナデ	胎土　密で硬質、焼成　良好 色調　10YR7/6(橙色) 回転実測B、No.29
11－5	土師器 坏	— 〈3.3〉 5.6	底部回転糸切り	内外面ともにロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好、色調10YR5/4(にぶい黄褐色) 回転実測B　No.1、フク土
11－6	土師器 坏	— 〈1.1〉 (6.2)	底部　手持ちヘラケズリ	内)ヘラミガキ 外)ロクロヨコナデ	胎土　密、焼成　良好 色調　10R6/8(赤橙色) 回転実測B　フク土
11－7	土師器 坏	— —		内)黒色処理、ヘラミガキ 外)ロクロヨコナデ	破片実測B　フク土 判読不明墨書あり
11－8	土師器 高台付坏	— 〈0.9〉 —	貼付高台、底部回転糸切り	内)黒色処理、ミガキはなし、十文字状の暗文あり 外)ロクロヨコナデ	回転実測A　フク土

第３節　溝状遺構
および　土坑

１）　第１号溝状遺構

遺構（第３図、図版四）

本遺構はＡ地区の西側から検出された。ほぼ東西方向に横走する溝である。

検出長11.2m、幅1.7m内外、深さ13～57cmをはかり、西から東へ向ってレベルを低下させる傾向にある。断面形は緩い逆台形を呈し、底面は割合平坦である。

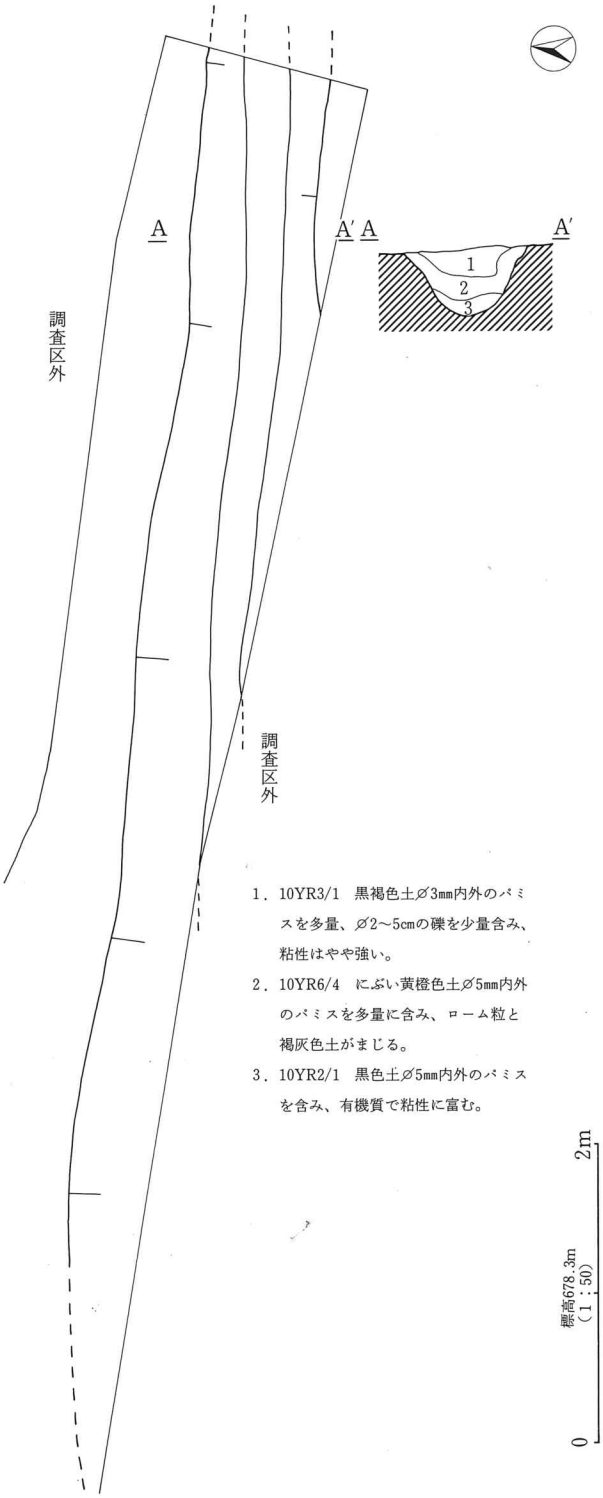
覆土は下層に砂の堆積がみられることから水流のあったことも予想される。尚、現在当調査区は地表下１m近くまで掘り窪めると湧水が著しいことも付記しておく。

遺物　平安時代の所産と考えられる土師器坏（内黒）が１片、中・近世の所産と考えられる内耳土器が６片出土したが、いずれも細片のため図化するには至らない。また、これらの遺物が本溝の年代を直接あらわすものとも考え難い。本溝の所産は漠然と中・近世以降としておく。

２）　第２号溝状遺構

遺構（第12図、図版四）

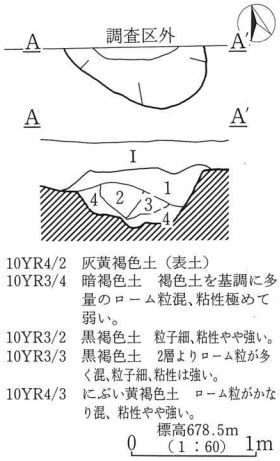
本遺構はＡ地区の東端より検出され



第12図　第２号溝状遺構実測図

た。ほぼ東西に直線的に横走する溝であるが調査されたのはごく一部で東・西それぞれに更に長く伸びていると思われる。検出長９m50cm、幅80cmを計測し、37～46cmの深度を有する。断面形はU字形を呈し、側壁の角度はかなり鋭角的である。覆土は三層からなり、１・３層は黒色土基調、２層はローム粒子が基調となる。

遺物　平安時代と考えられる土師器片１片、須恵器坏２片の他、現代の植木鉢の破片が出土した。いずれも細片のため図化するには至らない。構築時期は不明である。



第13図　第１号土坑実測図

３）　第１号土坑

遺構（第13図、図版四）

Ｂ地区の東側より検出され、第１号住居址に近接する。北半分以上は調査区外にある。

東西長117cm以上の楕円形を呈すると考えられ、深さは50cm以上と考えられる。覆土は四層からなり、１層は耕作土に近く、２・３層は黒色土基調、４層はローム粒が基調である。遺物は検出されず、時期判断できない。

第Ⅴ章　調査のまとめ

今回は幅約２ｍという狭い範囲であったにもかかわらず、平安時代の竪穴住居址２棟、時期不明の溝状遺構２条、土坑１基が検出され、横和地区では初めて本格的な発掘調査が行われた。遺構・遺物の詳細については前章で詳述してあるので、特に遺物の位置付けを中心にまとめたい。

遺構　後述する出土遺物の特徴から竪穴住居址２棟は平安時代の近い時期に構築されたと考えられる。一辺310cm余の方形か長方形を呈すると考えられ、カマドは北壁中央に付設、主柱穴が明確でないなど共通項も多い。位置関係は住居間16m余と近接する。また、Ｂ地区は１・２号住居址が存在することから居住区と考えられるが、Ａ地区は湧水が激しく、住居址分布も認められず、往時居住区であったとは考え難い。

遺物　比較的良好な平安時代の土器が２棟の住居址内から検出された。各住居址毎にその属性を探り、一応の位置付けを行いたい。

第１号住居址から出土した土器の種類は土師器、須恵器、灰釉陶器があり、土師器の占める割合が須恵器、灰釉陶器の占有率をはるかに凌駕する。土師器の器種には甕・坏・高台付坏があり、

甕は口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、胴部は砲弾形を呈する。口～胴部中位までロクロ調整胴部下位にヘラケズリが施される北信に主たる分布を示す器形である。坏は口径15.6cmのやや大ぶりなもの１点と口径13cm内外のものが４点ある。内面黒色処理されるものが多く、されないものは１点のみである。黒色処理はやや粗略で炭素吸着が十分でない部分も多く、研磨も粗雑で暗文状のものが多い。底部調整は回転糸切りが主である。高台付坏は形態の伺えるものはないが、内面黒色研磨されるものとされないものがある。須恵器は形態のわかるものがなく、先述したように量は極く僅かである。灰釉陶器は東濃系光ケ丘１号窯式期に比定される皿がある。

以上、第１号住居址から出土した土器は食膳具において土師器の占有率が極めて優位であること、土師器に内面黒色処理される傾向が強いこと、黒色処理ののちの研磨が粗雑化し、暗文状のものが多くなること、光ケ丘１号窯式期の東濃系の製品の流入が始まることなどの観点から、原明芳氏の食器類を中心とした平安時代時期区分によるところの第II段階の終り頃（９世紀末～10世紀初頭）に位置付けることが可能である。

第２号住居址から出土した土器の種類は土師器・須恵器・灰釉陶器があり、第１号住と同様土師器の占める割合が須恵器、灰釉陶器の占有率をはるかに凌駕する。土師器の器種には甕・坏・高台付坏があり甕は口縁部が肥厚して直立し、胴部は砲弾形を呈する。外面調整は第１号住居址の甕と同様で、北信に主たる分布を示す形態の一つである。坏は口径13.0cm、器高4.0cm、底径5.6cmの第１号住居址出土の土師器坏とほぼ近い法量を示すものと、口径12.2cm、器高2.9cm、底径6.0cmの器高の低くなったものがある。内面黒色処理されるものは１点、されないものは３点で、黒色処理衰退化の傾向が顕著である。黒色処理されるものは暗文状の研磨が施されるのみで、第１号住居址よりも更に研磨の省略化が進行している。この傾向は高台付坏においても同様である。底部調整は手持ちヘラケズリされるものと、回転糸切未調整のものが共存する。須恵器・灰釉陶器は先述したように量が少なく、しかも細片であるため、説明できない。

以上、第２号住居址の出土土器は、食膳具の坏に黒色処理されないものが増加すること、黒色処理されても暗文状の研磨が施されるのみであることなど、内面黒色処理衰退化の傾向が第１号住居址よりも顕著である。従って、原氏の平安時代時期区分では第II段階よりも新しい部分に位置付けるのが妥当と言える。

最後に出土土器資料中に特徴的にみられたロクロ調整の甕について触れておこう。従来、佐久地方では奈良時代以降煮沸具としては「く」の字、「コ」の字状に屈曲する口縁部をもち、胴部全面にわたってヘラケズリされる所謂「武蔵型」甕の主たる分布地域で、ロクロ調整の甕の主たる分布地域である北信とは様相を異にしていることが認識されている。ところが、本遺跡第１号住居址出土資料のように光ケ丘１号窯式期を基点とする東濃系の灰釉陶器が流入し始める時期になると所謂「武蔵型」甕が１点も存在しなくなる資料もみられるようになる。これと同様な傾向を

示す資料は佐久市三塚鶴田遺跡４号住居址などもあげられる。このような資料は今後増加することが予想され、東濃系灰釉陶器の流入と「武蔵型」甕の消滅→ロクロ調整甕の成立・発展への転換は密接な関係をもっていたと理解される。そしてこの現象は政治的支配体制、流通機構の変化などの歴史的背景を感じさせるのである。この問題については佐久地方の平安時代土器の流れをある程度的確に把握したのちに再考したい。また御代田町十二遺跡では東濃系灰釉陶器が流入する段階に入ってもロクロ調整甕は成立せず、所謂「武蔵型」甕が存続する傾向がみられるという。この遺跡差についても今後具体的な資料とつき合せて十分検討しなければならない。

引用参考文献

佐久市教育委員会　1978　『跡部町田』

佐久市教育委員会　1980　『蛇塚Ｂ』

佐久考古学会・佐久市教育委員会　1980　『周防畑遺跡』

小諸市教育委員会　1981　『五ケ城』

小諸市教育委員会　1983　『曽根城遺跡』

佐久市教育委員会　1984　『若宮遺跡』

佐久市教育委員会　1985　『鋳師屋遺跡』

小諸市教育委員会　1985　『宮ノ反』

佐久埋蔵文化財調査センター　1986　『芝　　間』

西　弘海　1986　『土器様式の成立とその背景』

佐久埋蔵文化財調査センター　1987　『淡淵・屋敷前・西片ケ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』

佐久埋蔵文化財調査センター　1987　『高師町・西大久保』

御代田町教育委員会　1987　『前田遺跡』

原　明芳　1987　「松本平における平安時代の食膳具―変化とその背景の予察―」『信濃』第39巻４号

長野市教育委員会　1987　『三輪遺跡（２）』

長野市教育委員会　1987　『横田遺跡群富士宮遺跡』

1．宮の上遺跡遠景（湯川対岸北西の久保遺跡より眺む）

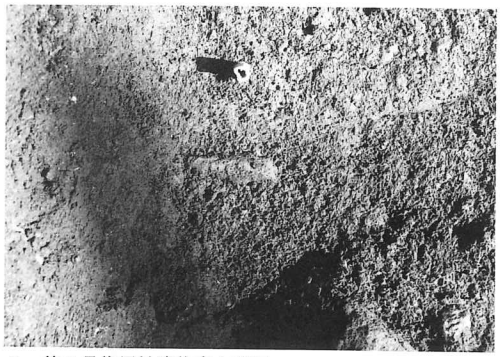
2．宮の上遺跡Ｂ地区全景（東方より）

1．宮の上遺跡B地区遠景（北方より）

2．第1号住居址（東方より）

3．第1号住居址（南方より）

4．第1号住居址遺物出土状況



5．第1号住居址遺物出土状況

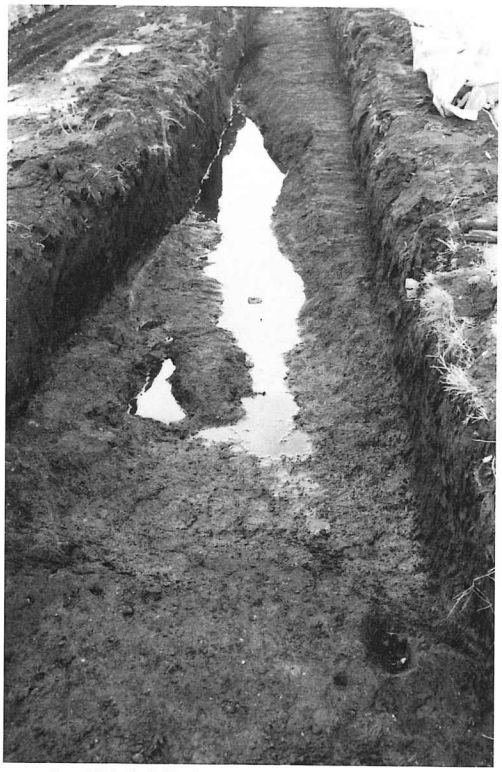
1．第1号住居址カマド（南方より）

2．第2号住居址（南方より）

図版　四

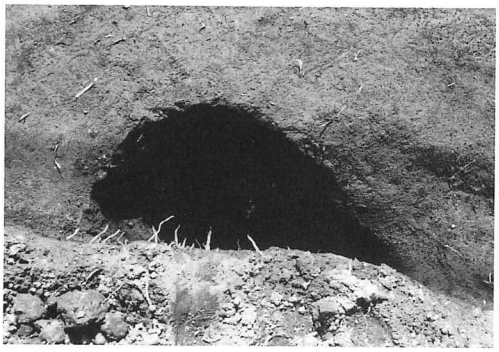
1．第２号住居址カマド関連部分

2．第２号住居址遺物出土状況



3．第１号溝状遺構（西方より）

4．第２号溝状遺構（東方より）



5．第１号土坑（北方より）

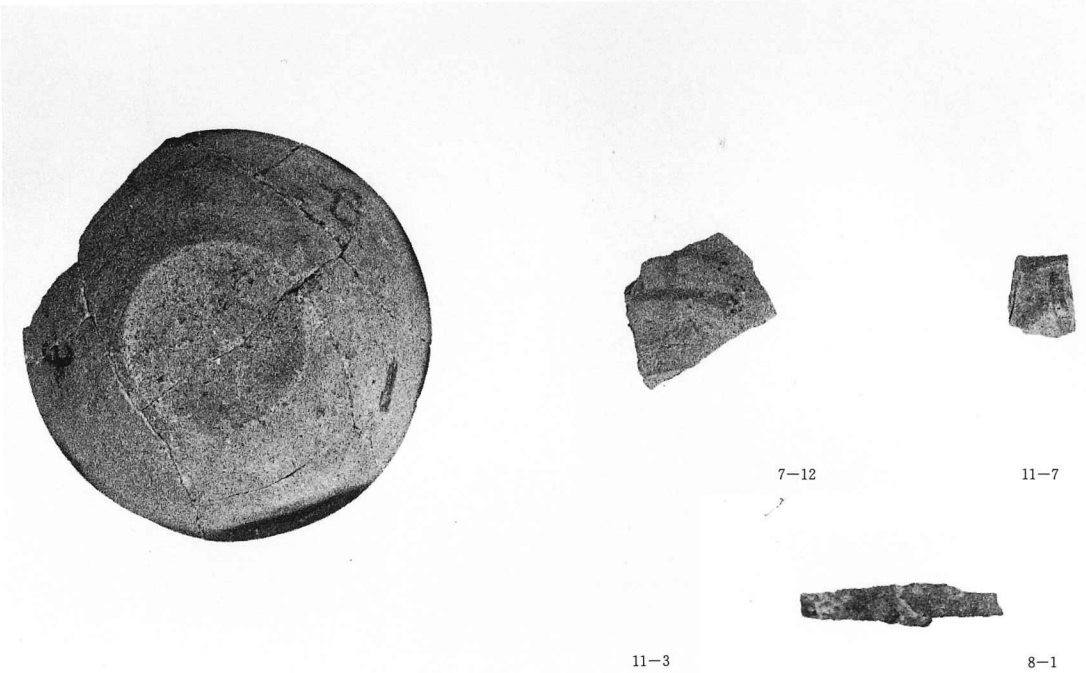
6．スナップ

1．第２号住居址出土遺物

2．第１号住居址出土遺物

3．第２号住居址出土遺物

4．第２号住居址出土遺物



5．墨書土器（１：２）

6．第１号住居址出土鉄器

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市宮の上遺跡群　宮 の 上 遺 跡

1988年２月
編集者　佐久埋蔵文化財調査センター
発行者　長野県佐久市教育委員会
印刷所　株 式 会 社 佐 久 印 刷 所

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第１集	『西裏・竹田峯』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第２集	『池畑・西御堂』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第３集	『芝　　間』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第４集	『新　町　Ⅱ』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第５集	『宿上屋敷、下川原・光明寺』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第６集	『淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第７集	『高師町・西大久保』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第８集	『北西ノ久保』
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第９集	『梨　の　木』

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集

長野県佐久市

岩村田遺跡群　菅田遺跡Ⅲ・新町遺跡Ⅲ

宮の上遺跡群　宮の上遺跡

栗毛坂遺跡群　中曽根遺跡　藤塚遺跡

1988年２月

編集者　佐久埋蔵文化財調査センター

発行者　長野県佐久市教育委員会

印刷所　株式会社佐久印刷所